

---

# アタシだけのヒト～ 5 5 5

百鬼丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アタシだけのヒト 555

### 【Nコード】

N4565I

### 【作者名】

百鬼丸

### 【あらすじ】

人型の家電製品、パソコンが復讐した東京で、大学受験に失敗した浪人生、犬井秀樹は捨ててあった人型のパソコンとケースを捨てたけど、その日をきっかけに、彼の世界が変わっていった。

## プロローグ

世の中は、本当に便利になったという。

皆はそういつている

それはある電化製品のおかげである

それが『パソコン』という人型の機械だった。

田舎から上京してきた俺にはよく分からないが  
なんか色んな事が出来るらしいけども

ある日をきっかけに、俺の世界が変わった・・・

暗い部屋に、1人の女性が、涙を流していた。  
女性の前には、3つのケースがあった。

「待っててね・・・絶対にいるかも知れないから・・・」

女性が呟きながら、ベッドの上の少女を見つめた。

## プロローグ（後書き）

今回は、秀樹とちいが出て、ファイズも登場しますので、お楽しみにしてください。

chapter 1 不思議な落し物

彼の名は犬井秀樹、この小説の主人公である。19歳で浪人中であり予備校に通うために、北海道から東京に上京してきて半年。アパートに1人暮らしで、実家からの仕送りは当然ないので、だから毎日バイトをしていて、いちおうバイクの免許はあるがバイクは持っていない。

「ゴミ捨て、終わりましたー」  
「おつかれー」

秀樹が、店長にゴミ捨て終わったことを伝えると、店長がパソコンをやりながら答えた。

「なんだ？パソコンに興味があるのか？」  
すると店長が、秀樹に聞いてみる

「いや・・・んなわけじゃ・・・」  
「いいぞーこれ最新機種なんだけどなー速いから立ち上げがサクサクだしー」

店長が自慢していると、パソコンがにこっとしてたので、秀樹はちよつと照れた顔をした。

「お前も買い換えるなら、これくらいにしとけよー！」  
と店長が秀樹の背中をどんと叩いて尋ねた

「は・・・はあ・・・」

秀樹の言葉は、それだけだった。

「おつかれさまでしたー！」

秀樹はバイトが終わったので、あいさつして帰っていき

「パソコンかあ・・・」

しばらく歩くと立ち止って

「んなもん買えるわきゃねえじゃんかよ！万年金欠のオレにー！」  
と泣きながら、大きな声で叫んだ。

「オレだって欲しいよパソコン！したいよメール！見たいよ、インターネットのエロサイト！」

大声で強く、叫び終わり

「独り言、増えたなオレ・・・」

と小さな声で呟いた。何しろ1人暮らしだから、独り言を言うことはあるから。

予備校でもバイト先でも、パソコンを持ってないのは秀樹だけだった。なにしろパソコンは高いから、そもそもパソコンを買えない奴が、バイクを買えるはずは無かった。

「欲しいなあパソコン。ここにめっちゃくちゃ可愛い奴、落ちてないかなあ」

秀樹は歩きながら呟き続けたら、ゴミ捨て場に包帯を巻かれた少女が落ちていた。

「につ人間ー！」

秀樹は、めやくちゃ驚きの声を上げた。

「死体か！？殺人かー！？」

とにかく慌てたが、機械の耳を見て

「あ・・・なんだパソコンかあ」

とほっとした。

「ん？待てよ。これはパソコンで、ここはゴミ捨て場で、ってことはー！」

確認した後に

「これはゴミなんだよな？じゃあオレが貰っても、いいんだよな？」  
周りをきよるきよるして、パソコンを持つとうとした。

「ん？」

そのパソコンの隣りにある、ケースに気付いた。

「このケースは？落し物だよなあ？だったら明日交番に届けよう。」  
そう言うと、ケースを持ってパソコンを持ち上げた。

「おつ重いなあ・・・これがパソコンの重みかー」

何か落としたのに気付かずに、アパートに帰ろうとしたがあまりに重くて空き地にひと休みした。

「あー重いなあーところで？これ何が入ってるんだ？」

と疲れきった声で、ケースを開けてみた。中に入ってたのはデジタルカメラ、トーチライト、携帯電話、そしてベルトだった。

「何だこれ？なんでベルトや携帯がこのケースに？」

と不思議そうに言いながらも、説明書を手にとって読んでみた。なぜかベルトを巻き付けみると、そこに男がやって来て

「なっなんですか？」



秀樹が、男に尋ねた。

「そのベルト、こっちに渡してほしいんだけどー」

男がそのケースを欲しがってるみたいだが

「えっ？でもこれ、落ちてた物で、アンタの物だっていう証拠もないし・・・」

ちよつと動揺しながら断る秀樹に、しばらくして

「だったら、力づくで奪うだけだあ！」

男は大声で叫ぶと、男が灰色の牛の姿をした怪物の姿に変わる。

「ばっ、化け物!!！」

「化け物じゃねえよ。俺は人類の進化系、オルフェノクだあ」

叫ぶ秀樹にオックスオルフェノクがそう答えて、秀樹に近づいてきた。

「あっ、そうだこのベルトを使ってみよう!!！」

秀樹が思いつくと、逃げながら説明書を読む。

「えーと、まずはこの携帯に、555、ENTERと打ち込んで!」  
「？」

と説明書を読んでそこに書かれたとおりに、打ち込むと

『STANDING BY』

と音声が出て

「そっ、そしてベルトに差し込んで倒せ!？」

その瞬間に転んでしまい、オルフェノクが近づいてきたので、急いで起き上がって

「へっ変身!？」

なぜか秀樹がそう言って、携帯をベルトに差し込んで横に倒した。

『COMPLETE』

すると音声が流れて、そのベルトから赤い光が一直線にでて、秀樹の体を包んで、閃光が走った。その光が消えるとそこにいるのは、黄色く、と同じ形の目と、黒いスーツで銀のアーマーを着た赤いラインの姿をした戦士だった。

「これが、ファイズ!？」

「ファイズ?」

オルフェノクがそう呟くと、ファイズがその言葉に気付いたが、オルフェノクが手を大きくしてファイズに殴りかかってきた。

「うわあ!?!どっどっすりゃあ!?!」

chapter 1 不思議な落とし物（後書き）

今日は、個々までです。次はこの続きを書くのでお楽しみに

変身したは良いがどうやって戦えばいいか分からなくて、とにかく逃げながら説明書を読んでいた。

「なになに？携帯を外して、画面に書かれた数字を押せ！？」

と書かれたままに、携帯を外して横に折って銃の形にして103、ENTERと打ち込んで

『SINGLE MODE』

と音声が鳴ってそのまま銃をオルフェノクに向けて、引き金を引くとアンテナからビームが発射して、オルフェノクに命中した。

「すっ、すげえー！」

ファイズが声を上げながら、携帯をベルトに差し直したがオルフェノクが起き上がって、巨大な手を地面に叩きその振動でふらついたファイズを殴り吹っ飛んでしまったファイズは、立ち上がってもう一回説明書を読むと

「トーチライトにセッションメモリーを差して足に付けるって？つかセッションメモリーで何だー！？」

と叫んだがそれが携帯に付いてあるマークに気付いて、ファイズが急いでセッションメモリーをトーチライトに刺し込む

『READY』



「じわっ、やべー！」

秀樹はベルトや携帯をケースに入れて、パソコンを持って空き地から去っていった。

しばらくして、アパートの自分の部屋に入った。

「はーはー・・・しかし、ほんと何だよ。あの化け物はー」

と呟いた秀樹だったけども、途中からパソコンに目を向けた。

「しかし〜こっつて見ると、普通の女の子と変わんねえなあ」

そう言っつてパソコンを触つてみた。

「・・・やわらかいし、きれいだし、つーかこれって新品じゃねえのか？」

秀樹は顔を少し真つ赤にしながら呟いて

「大丈夫、オレがちゃんと使つてやるからな。」

と張り切つて起動しようとしたして、時間が経過した。

「スイッチは、どこなんだー！」

どうやら、スイッチが見つからないみたいであつた。

「突起物は全部押したぞ！全部・・・てっ、まさか・・・／／  
／」

秀樹は小声で、下半身の奥を見ながら呟いた。

「オ・・・オレはやらしー事は、動かないと困るからな・・・／／  
／」

そう言っつてパソコンを抱きしめて、ドキドキしながらその奥を押し  
た。カチと音が鳴るとパソコンの目が開いて、そのまま起き上がつ  
て包帯が取れていき、秀樹はそれをポーと見つめてしまった。

そのパソコンが、秀樹を見つめて

「・・・ちい？」

「え・・・」

そう言つと秀樹は思わず声を出す。

「ちい……」

「ちい？それがお前の名前？」

秀樹が尋ねると、いきなり抱きついて

「えっ、ちよつと!？」

声を上げながら、床にパソコンごと倒れてしまう。

「確かこれって、拾った女の子が可愛くて、不思議な力があって、色々してくれて、料理洗濯、あっち方面も！」

と心の中で思いながら

「なあ……お前名前が無いなら、ちいって呼んでいいか？」

とパソコン改め、ちいに聞いてみると

「ちいっ!!!」

気に入ったらしく、また秀樹に抱きついて

「む……胸やわらかーい……／＼／＼」

また心で呟いてしまう、秀樹だった。



chapter 2

パソコンが目覚める（後書き）

ファイズの戦いに、パソコン改めちいが目覚めて、この日が秀樹の世界が変わる日だったので、次回もお楽しみに

chapter 3 謎が謎を呼ぶ

晴れた朝の日、秀樹がまだ布団で寝ていたが朝日が顔に当たったので「んーまぶしいな・・・もう朝か？」

秀樹は小声を吐いて、カーテンから顔を逆にすると

「ちい」

「うわあああああ！／＼／＼」

目の前に少女と一緒に横になってたので、かなり驚きの声を叫んで少女から離れたが耳に気付いて

「そうだ・・・オレ、パソコンを拾ったんだった。」

と一安心した。

「ちい？」

「あーごめんごめん、驚いただけだよ、ちい。」

ちなみに、このパソコンの名前が分からないので、秀樹がちいって名づけた。

「とつとにかく！ちいが何が出来るか、調べなきゃ！」

秀樹は張り切っていたが、ケースのことに気付いて、ケースに手を伸ばした。

「そういえば、これも何なんだ？昨日のオルフェノクとかいう化け物が、ファイズって言ってたけどなー？」

秀樹がケースの中の、携帯やベルトを取り出して考え込んで

「もしかして、これってちいに関係するのかな？」

そう呟いてちいを見ようとしたら、ちいは秀樹が持っている、エロ本の写真の真似をしていた。

「わあああああああ！？／＼／＼」

とちいの姿を見て、大声を出した秀樹に

「犬井くなんか大声してたみたいだけど、どうしたんだ？」

部屋の玄関から声がして、誰かが扉を開けようとしていた。

「え！ちよつとまって！」

秀樹が慌てて扉に行こうとした。すると扉が開いて、小人みたいのが秀樹の顔面に跳び付いた。

「おっはよーございまーす!!!」

小人が秀樹の顔を、踊りながら朝の挨拶をした。

「なっなんだー」

と秀樹が大声を出しながら、起き上がったので、小人は吹っ飛んで目の前の男性にしがみ付いて

「マスター怖かった。」

「あはははは。ごめんごめん、びっくりした?」

男性が秀樹に尋ねた。

「びっ、びっくりするに決まってるだろ!?!」

さて個々で、キャラを説明します。彼の名は草加拡、秀樹と同じ予備校の生徒で、同じアパートの住人である。小人の名はすももで、拡が自分で作ったノートパソコンである。

「しかしどうしたんだ?大きな声を出して?」

拡が部屋に入ると、ちいを見つけて

「あ、えーとー」

「犬井。なかなかやるなー童貞卒業か?」

拡が秀樹にからかった口調をしながら尋ねる

「違うーこの子はパソコン!」

秀樹が大声で、拡に言った。

「ありや本当だ。しかし可愛いパソコンだなーあれお前パソコン持つていないんじゃないあ?」

「そ、それは」

秀樹は、昨日のことを拡に話した。

「へーそれじゃあ、そのオルフェノクとかいう怪物を倒して、この子を拾ったてことかー」

「まーなーてか、パソコンでどう使うんだ?」

秀樹が拡に、パソコンの使い方を聞いてみた。

「あーまずは、モニターにコードを繋いで、OSやCPUのスピー

ドとかバージョンが表示されるんだよ。」

「なるほどー知らなかった。」

と呟く秀樹だったが、OSやCPUなんて全然分からなかった。でもテレビには(N O D A T A)て表示された。

「こ、これって?」

「データが無いのか?でもOSも何にも無いのに動くなんて……  
拡が不思議そうに呟くと

「OSが無いと、動かねえのか?」

と拡に、尋ねてみる

「ソフトがインストールされなきゃ、ただのマネキンだよ。」

その言葉に脱力して

「そうなのか……やっぱり買わなきゃならないんだ。」

と言葉を漏れる。

「でもなーどのOSにしたら良いのか……ちょっといじっていい?」

その言葉に秀樹は

「い……いじるって……」

拡がちいの着ているYシャツをめくって、胸を触って

「この子どもこの製品だ?PCNだとここに型番が……」

「!!--」

突然の拡の行動に、秀樹が心で声を上げた。さらにちいの足を持ち上げるので

「うわあああ!!ノノ何やってんだ!?ノノノ」

秀樹が大声を上げて、腕を拡の首を絞めて聞いた。

「何って型番を……」

そんなこんなで、秀樹はかなりドキドキしていたので

「しょうがねえー、すももにチェックしてみるか。」

そう言っつて、すももをちいの肩に乗せて、コードをちいの耳に繋いだ。

「頼むぞ、すもも。」



しばらくして、拡がちいが自作パソコンではないかと言い出して、自作に強い奴を紹介してくれた。だから秀樹はちいを連れて行くこととしていて、ついでにケースのことも聞いてみようとしていたのでケースも持っていた。

「あら？こんにちは、犬井さん。」

「あ、日比谷さん。」

彼女のの名は日比谷千歳。秀樹が住んでるアパートの管理人で、今年27歳でバツ一みたいけど美人である。

「その方は？」

の千歳が秀樹に聞いてきたので

「あ、パソコンのちいです。」

「ちいちゃんね。」

にこつと微笑んだので、ちいも真似して微笑んだ。

「あら？ちいちゃんのお洋服大きいのかしら？」

「いや！あの！服を買っていないんで……」

秀樹が慌てて答えた。

「日比谷さん……誤解しているかな……」

と秀樹が心の中で心配と緊張でいっぱいになっていて

「いつてらっしやい。」

千歳が出かける2人にあいさつした。

しばらくして、大きな屋敷が見の前に立つと

「ここかー!？」

て大声で叫ぶ秀樹だったが、気を落ち着かせて

「あのー犬井と申しますけど、稔さんいらっしゃりますか？」  
監視カメラに聞いてみて

「うかがっております。」

そう言つて門が開いたので、恐る恐る門をくぐつて屋敷に入ると、そこにいたのは露出の多いメイド服をしたパソコンが、4体立っていた。

「うぐ……ノノノ」

秀樹が鼻血が出ないように鼻を押さえると

「パソコン相手に鼻血吹かないでねー」

階段から中学生くらいの男が、下りて来た。

「え、君が……」

秀樹が尋ねると

「ああ、国分寺稔。よろしく……」  
と無愛想にあいさつをした。

「じゃあ君が、自作パソコンに詳しいって？」

秀樹が、稔に聞いてみる

「まあ・・・立ち話もなんだから、上がったら？」

稔がそう言くと、パソコンが靴を脱がそうとした、しかし秀樹がかなり慌てるので

「うちのパソコンに、あんまり勃てないでよね。」

稔が秀樹に注意すると、ちいがそれを見て真似をし始める。

「ちい！真似しなくて良いよ！」

秀樹がちいに言くと、稔が来て

「この子が？製造元不明で、OSも無し動くパソコン？」

稔が、ちいを見て

「この子・・・chobits・・・かもしれない。」

と呟いた。



chapter 3 謎が謎を呼ぶ(後書き)

これで終わりです。次回は、chobitsとファイズギアの謎が解るかも知れないし、またバトルかもしれないし、よろしく。

chapter 4 2つの都市伝説

「どっ、どうなってんだよ！」

秀樹が大声で驚いた。それはちいを調べようとしたパソコンが、次々と壊れてしまったから。

「この子の解析には、パワーが足りないんだな。」

「でかい人型パソコン、4台でもか！」

秀樹は少し慌てた口調で、稔に質問したのだった。

「私が、やってみましょうか？」

2人は声がした所に、顔を向けるとメイド服をした女性が立っていて

「柚姫……」

「あっお邪魔してます。オレは犬井秀樹といます。」

いきなりの美女に、秀樹は焦りながらあいさつして

「はじめまして、柚姫と申します。」

柚姫も、礼儀よくあいさつした。

「あの……国分寺君のお姉さんですか？」

秀樹が、柚姫に尋ねると

「私は稔様に作っていただいた、パソコンです。」

「ええ!？」

柚姫はそう答えたので、秀樹は思わず声を上げた。

「でも……」

「性能をお知りになりたいんでしょう？」

動揺した稔に柚姫が話すと

「……うん。」

柚姫がコードを出して、ちいに接続して

「よろしくお願ひします。」

そして解析が始まると、柚姫からピーピーと音がし始めていき、突然柚姫が倒れそうになって

「もういい、柚姫!」

稔がとつさに受け止めて

「データの1部が、クラッシュしました。」

「どのデータ？」

稔が心配そうに尋ねると、柚姫は

「家事データと、株式情報です。」

「人格データじゃ・・・ないな？」

そのとき、稔の行動を見た秀樹は

「なんかこいつ、柚姫さんてパソコンには、態度が違うような？」  
と心の中で言うのだった。

「ちいは！？ちいも壊れたんじゃ！？」

秀樹は、心配そうにちいを抱いた。

「ちいさんには、何も影響はありません。でも・・・」

その言葉に、秀樹が

「でも・・・何だ！？」

と質問したので、柚姫は

「じつはちいさんに、プロテクトが掛かっています。」

「えええ！？」

その言葉に、声を上げる秀樹だった。しばらくして、稔が柚姫のデータをインストールして直した。しかし稔は何かつらそうな感じをしていた。

「ところでさ、そのケース？」

「ケース？あつ、これ？」

稔がケースのことを聞き出したので、秀樹はとつさにケースをテーブルに置いた。

「気になっていたんだけど、その文字って。」

文字というのは、ケースに印刷されている（SMART BRAIN）という字だった。

「えつ、このスマートブレインって書いてある文字？」

「うん、このスマートブレインって、あの複合企業のことだよな。」  
稔が秀樹に尋ねると

「そうだよな。パソコンとかの電化製品はもちろん、バイクや薬まで作っているあのでかい会社だよな・・・」

と会話しながらも稔はケースを開けて、ベルトや携帯を見つめる

「これってもしかして、ファイズギアかも？」

「ファイズギア？何だそれ？」

秀樹は、稔に質問した。

「都市伝説だよ。オルフェノクを倒す救世主、ファイズっていう。」

「オルフェノクって・・・昨日の化け物だ!？」

秀樹は昨日の夜のことを話すと、稔はオルフェノクの事を語り始めた。

「オルフェノクというのは、特定の人間が死ぬときに覚醒した、人類の進化系のことだよ。」

「じゃあ、あいつは1回死んだって事？」

稔の話しに、秀樹は小声で呟いた。

「そして、そんなオルフェノクを倒すために作り出したのが、仮面ライダーファイズというものだ。」

「仮面ライダー」その言葉に、秀樹はもつと混乱した。仮面ライダーってテレビに出るヒーローだと思っていたのに、でも実際に変身したんだと自分に言い聞かせながら

「それじゃあ、このファイズギアを作ったのが、スマートブレインか？」

「いや、都市伝説だから・・・」

少しテンションが下がる、秀樹であった。

「ところで、さつきちいをチヨビッツって言ってたけど、チヨビッツってなんだ？」

今度は、ちいのことを質問した。

「chobitt・・・伝説のパソコンと呼ばれている。」  
と稔は質問に応じた。

「chobittsっていうのは、自分で考えて行動するパソコンなんだよ。」

「それって、柚姫さんもそうだろう？さっき自分で考えてちいの性能をチエックしてくれたし。」

秀樹は稔に、柚姫のことを聞いてみる

「違う。柚姫はぼくがインストールした、プログラムにそって動いているんだよ。」

稔がさっきの柚姫の行動について話した。

「故障したりするけど、プログラムなしでは動けない。けれど、c h o b i t s シリーズは違う。」

「そ・・・そんなすごいパソコンが、このちいか!？」

秀樹は強く叫んだ。

「でも都市伝説だから、デマだろうね。」

その言葉に、こけて頭をぶつけてしまい

「こんだけひっぱっておいてそれかーい!？」

大声で叫ぶ、秀樹だった。

そして秀樹とちいは帰ろうとすると

「もしものときのために、メールアドレスか電話番号教えてよ。」

「ああ、良いけど。」

秀樹は電話番号を言うと、柚姫はそれを記憶し始めた。

「犬井さん、ちいに電話番号を聞いてみてよ。」

「え？なんで？」

「いいから。」

分らないまま、ちいに電話番号を聞いてみる

「03 - x x x - x x x - D F 3」

するとちいは、喋りだした。

「喋った！でもなんで!？」

秀樹は驚いて声を上げた。

「どうやらちゃんと学習ソフトは入ってるよ。たぶん初期化したか

ら教えれば色々できかも・・・」

「ほんとか!？」

秀樹は嬉しそうに声を上げるのだった。

「でもいくら可愛くても、好きにならないほうが良いよ。」

「え?」

その稔の言葉に、秀樹は思わず声を出す。その後、帰り道を歩きながら、秀樹はちいを見つめた。

「しかし教えたて、どうすりゃいいんだ?」

秀樹は、歩きながら愚痴ると、前から男性の姿が現れて

「なあ、金はいくらでも出すから、そのケースをくれよ。」

前にもこんなことがあったから、秀樹は

「悪いけど、これはあげないし、売らないから。」

と断った。すると男性が

「そうか・・・それじゃあ仕方ないなあ!!」

声を上げながら、サボテンの怪物カクタスオルフェノクになる。

「やっぱりなあ。ちい危ないから離れてろ!!」

秀樹はケースを開けてファイズドライバーを着けて、ファイズフォンに変身コードを入力し

「変身!!!」

『COMPLETE』

と声を上げてファイズフォンをベルトに差し込むと体が光ってファイズになった。

オルフェノクが全身の棘を飛ばしてきたので、ファイズフォンを銃にして飛んできた棘を狙って打ち出した。しばらくすると、棘がなくなつたのでカメラ型のパンチングユニット、ファイズショットを手にとつてそれにミツシヨンメモリーを差し込み

『READY』

と音声が出てき、グリップを握つてENTERキーを押して

『EXCEEDED CHARGE』

音声が出て光がラインを通つてファイズショットに着くと、ファイズが走り出してオルフェノクにグランインパクトを打ち込んでカクタスオルフェノクはそのまま灰となつて崩れた。

「ちい?」

ちいは終わつたのを確認すると、ファイズに抱きついた。

「ちい・・・大丈夫、オレが守つてやるよ。」

ファイズはそう心に誓つた。

そのままアパートに着くと管理人の千歳がちいのために、小さいときの洋服をくれたのでちいはその服を着るのであつた。

「似合うよ、ちい!」

秀樹は拍手しながら、ちいに言った。そるとまたちいが抱きついた。「オレなんかじゃ、上手く教えてやれないけど、これからもよろしくなちい。」

「ちい!!!」

喜んだらしく、前から強く押したため、転んでしまいスカートがめくれたのでつかさず直して

「あとは、下着を買わなきゃな・・・」





chapter / 4 2つの都市伝説（後書き）

お次は、秀樹の日常を書くので次回をお楽しみに。

朝、秀樹は予備校に行くつもりとしていた。ちなみに授業が終わったら、バイトに行くのだった。

「じゃあちい、行ってくるよ。」

秀樹はリュックを背負ってケースを持って、ちいにあいさつをする。

「ちー」

「ちい、『ちー』じゃなくて『いつてらっしやい』だ。」

と秀樹はちいに、言葉を教え込んだ。

「いつ・・・て・・・ちっ・・・しやい。」

「よし！出かける時は、『いつてらっしやい』だ！」

「いつてらっしやい！！！」

その時秀樹の心は、喜びとちいの可愛さに、ジーンときた。

「いいか、オレの名前は『秀樹』分かる？」

今度は、自分の名前を教え込んだ。

「ひ・・・でき。」

とちいが言ったので

「そう！『秀樹』」

「秀樹！！」

「いいぞ！ちい！」

秀樹がまた喜んだが

「ひでき、ひでき、ひでき、ひでき、ひでき。」

ちいは指差し「秀樹と覚えたらしく、指を差した物を秀樹と言いつけた。

「ちがーう！！」

秀樹は大声で、突っ込むのだった。

しばらくして予備校について教室に、入り拡と隣の座席に座ると、昨日のことを話した。

「へーそんなごっついパソコンを拾うなんて、ラッキーだな。」

「でもよ・・・パソコンはただでも、それ以外は有料だし、それにまたオルフェノクが襲ってくるかも知れねえし・・・」

秀樹は疲れきって、前屈みになる。

「そういえば、あのノートパソコンは？」

ノートパソコンとは、すももの事で、昨日ちいを調べようとして壊れてしまったので、聞いてみたのだ。

「もー大変だったんだぜ。でも徹夜で修復したから、すももー」と拡がバツクを開けて呼ぶと、すももが元気良く出てきた。

「よかった。白目のまんまだったらどうしようかと思ったよ。」  
安心したかのようにホッと秀樹だったが

「大事なすもも、あのままにするかよ。データだったからよかったけど、部品が壊れたら、お前が請求するところだったよ。」

拡がそう発言すると、秀樹が不機嫌そうに

「金なら無い。」

「無くてももらう。」

と話しているうちに、扉から教科書を持った女性がやって来た。

「はいみんな、席に着きなさいよー」

「おっ！清水先生だ。」

彼女の名前は清水多香子で、秀樹と拓の通っている、予備校の講師である。

「みんなー宿題やった？」

多香子は、教室全員に質問すると

「宿題じゃないだろ、先生。」

「ここ、予備校だぜ。」

と声上がるのだった。

「いいじゃん、あたし小学校の先生になりたかったから。」

多香子がそう発言すると、

「いいよなー清水多香子先生。」

秀樹が微笑みながら呟いて

「はい注目！どんどん置いていくわよー」

こうして、授業が始まるのだった。

授業が終わって、これからバイト先の居酒屋に行くのだった。

「せーんぱい！」

誰かが声をかけられたので後ろを向くと、そこに高校生ぐらいの少女が立っていた。

「裕美ちゃんか。」

彼女の名前は太田裕美、秀樹と同じように居酒屋で、バイトをしている。

「あいかわらず元気だなー」

「先輩こそ元気ですよー」

歩きながら話しているうちに、秀樹は裕美の胸を見てしまうのだった。

「しかし、最近の子は発育が良いんだな……」

「Fカップですけど。」

「え？え！？なつ、何で急に！？／＼／＼」

突然の裕美の言葉に、驚きと慌てを見せる秀樹だった。

「先輩見てたから。」

「いや！けしてやらしい気持ちで！！／＼／＼」

なんとか誤魔化そうとするが、慌てたため声が荒れるのだった。

「先輩、可愛いー」

と秀樹の行動を見て、笑う裕美だった。

そしてバイト先の居酒屋でテーブルを拭きながら、レジで伝票チェックをしているパソコンを見ながら

「いつかちいも、出来るようになるかなー」

と独り言を言うのだった。

「先輩、パソコン買ったんですか？」

裕美が秀樹に尋ねると

「いや、買ったんじゃないなくて拾ったんだよ。そっぴや裕美ちゃんも

パソコンは持つてる？」

今度は秀樹が、裕美に尋ねてみる

「はい、わたしのはこれです。」

裕美は懐から、小さいぬいぐるみのフィギュアを取り出した。

「何これ？」

「モバイルとって、ちょっとした事ならこれでOKですよ。」  
と説明していると、店長が来て

「よし開店だ!!」

こうして、バイトが始まるのだった。

バイトが終わってアパートに帰ろうとしたが誰かに後をつけられる事に気付いて、突然立ち止って後ろを向くと誰もいなかったが秀樹は溜め息を吐きながら

「その電柱に隠れてるのは解ってるぞ。」

すると電柱の後ろに隠れていた、フクロウの怪物オウルオルフェノクが出てきて

「何で気付いたんだ!!」

オルフェノクは荒れた声で聞いてみると秀樹が

「なんかオレ、そういうヤバイ雰囲気敏感になっただよな」  
いつの間にかフェイスドライバーを着けていて、フェイスフォンに変身コードを入力して

「変身!!」

『COMPLETE』

そのままファイズに変身すると、オルフェノクが口から黒いガス吐いたので、ファイズが視界が見えない隙に、鉤爪で斬りつけるのであった。

「くそつ、こうなつたら・・・下手な鉄砲だ!!」

ファイズはファイズフォンをフォンブラスターにして、でたために撃ちまくると

「ぐわあ!!」

と叫び声が聞こえて、ガスが風で流されて視界が良くなってきたらオルフェノクが肩を押さえながら倒れていた。

「よっしゃあ!!下手な鉄砲も数撃ちや当たるだ!!」

下手な鉄砲も数撃ちや当たるとは、射撃とかが下手でも、とにかく撃てば当たるということわざで、そのままファイズポインターをミッションメモリーに差して、足につけてENTERを押して

『EXCEED CHBGE』

そのままジャンプして必殺クリムゾンスマッシュを決め込んで、ウルオルフェノクはそのまま灰となって崩れた。そしてアパートに着いて部屋に入ると

「ちー!!」

ちいは声を上げて、秀樹に抱きついて

「ちい帰ったときは『お帰りなさい』だよ。」

ちいにまた言葉を教えのだった。するとちいは

「お帰りなさい!!」

笑顔であいさつを言うのだった。

「ただいま。」

こうして、秀樹の1日が終わるのであった。

chapter 5 秀樹の日常（後書き）

これが、秀樹の日常です。次回はちいがおつかいに行くんですけど、何お買うのかはお楽しみに。



## chapter 6 ちいのおつかい

ある日の夜、アパートの自分の部屋で秀樹は悩んでいた。

「しかしなー・・・服は管理人さんからもらったけどなー」

「秀樹？」

ちいが心配そうに、秀樹に近づく

「ああ、ちい・・・でもやっぱり女物の下着を買いに行くなんてな・・・／＼／＼」

どうやら、ちいの下着の事で悩んでいたらしい。だけどさすがに女性の下着を買いに行くのは、恥ずかしいのだ。深く溜め息を吐くと「よう、何悩んでるんだ？」

そのとき玄関の前には、拡とすももが立っていた。

「草加!？」

「そんなに恥ずかしいのか？」

拡が尋ねると、秀樹はかなり焦ってさらに荒れた声で

「だって店から女の子オーラがしまくってて、かと言っていつまでもこのままって訳にも・・・」

そして悲しそうにちいを見つめる秀樹に

「それなら、ちいちゃんに自分で買いに行かせたら良いんじゃないか。」

拡が思いついた事を秀樹に話すと厳しい表情で

「なつ、何言ってるんだ!!ちい1人で出歩くなんて!!」

「大丈夫、すももを貸すよ。こいつにはGPSやナビゲーションが組み込まれているから、目的地までちゃんと教えてくれるぜ。」

「すげえ・・・そんな事までできるのか？」

拡の説明に驚いてすももを見つめると、すぐさま視線をちいに向けて「なあちい、買い物行ってみるか？」

「かいもの？」

「ああ、買い物だ。」

朝晴れた日、秀樹はエロ本を開いて、ちいに何を買に行くか教える。

「いいか、ちい・・・」

真剣な顔で、エロ本の写真のところに指を差して

「今日は、これを買に行くんだ。」

と教え込むと、ちいはその写真を見つめて

「オカズ。」

「ちっ！違うー！！！！」

ちいの発言で、自分の髪をグシャグシャにしながら声を上げてしまい

「ある意味、オカズだけど・・・そうじゃなくて、今この女の人  
がはいている奴！！！！」

赤い顔して、今日買う物を何とか教え込んで

「ちい分かった。今日パンツを買いに行く。」

「そうそう、パンツをね。」

ようやく覚えたらしく秀樹はホッと一安心したが、突然すももが起き上がり

「ピーーーーー！お目覚体操が始まりまーす！ピッピッピッ、ピッピッピッ、ピッピッ。」

いきなり笛を吹いて喋りだして、秀樹とちいはすももと一緒に笛の音に従いながら、体操をし始めていきしばらくすると

「てっ、何じゃそやー!!」

「うひゃーああ、怖いです!!」

すももに顔を近づけてつつ込むのだった。そんなこんなで、秀樹は予備校にちいは買い物に出かけるのであった。

「それではナビゲーションを開始します。左向け左!」

すももの指示に、ちいは左に歩き出した。階段を下りて橋を渡つてすももの指示通りに町並みを歩いて行くと、猫の親子が歩いてきたので立ち止まり

「猫。」

指を差して確認すると

「ピンポン正解です。横切るまで待ちましょう。」

とすももの言われたとおり待ったけど、3匹のうちの1匹には何か布のような物を口でくわえていたのに気付いて

「パンツ!」

ちいはそう呟きながら、猫の親子の後をつけてしまう。

「警告!警告!目的地ではありませんせーん!」

すももがちいに指示を出したけども、全然言う事を聞かずに猫に近づいて、子猫が布を落としてそのまま進んで、ちいはその布を拾った布はただのハンカチだった。

そのとき予備校では、シャープンの芯が折れてしまい秀樹は心の中で  
「これは……まさか……」  
と思いながら思わず

「何か事件でも!!」  
立ち上がって声を上げてしまい、多香子が教科書を持って秀樹の目の前で

「犬井君……26ページから。」  
と話しかけられたので

「は……い……」  
前かがみになって返事した。拡や多香子だけでなく教室の全員から  
妙な視線を感じてしまい、恥ずかしくて泣いてしまった。

予備校が終わって心配なのでちいを探す秀樹であり、ようやくちい  
を見つけてその後をつけるのだった。しばらく歩くとちいは本屋で  
下着の女性のポスターを見て

「パンツ！秀樹のオカズ!!」  
「何やってんだ！たしかにオカズだけど!？」

その言葉に隠れていた秀樹は扱けて小声で叫ぶ。  
「違います。これはポスターです。」

すもがちいに言うそのまま歩いていったので、秀樹はその後を  
つけて行く。

「ち？」

するとちいはなにかに気付いて後ろを振り向くと、そこには大型のポリバケツしかなかった。

「気のせいです！気のせいです！前へ進みましょう！」

とちいはそのまま歩くと、ポリバケツがちいの後を着いて来た。じつはこのポリバケツの中に秀樹が隠れていたのだが、するとそこにゴミ収集車が来て2人の作業員が、秀樹が入っているポリバケツをゴミ収集車に放り込んだ。

「なんでこんな所にポリバケツがあるんだ？」

「知らね~~~~~」

と作業員が会話をしながらポリバケツはバキボキベキと、音を立てながら収集車で潰されてその場を去った。そしてちいの後ろをボロボロで血まみれの秀樹が心配そうに見守っていたが

「あつ・・・あれは!？」

そのときちいの目の前には、パーマでグラスンをしているヤクザのような人が歩いていて、ちいとヤクザがすれ違つと

「おいコラ。」

ヤクサメに声をかけられたので、ちいは振り向とヤクザがやって来て

「お前が当たつたせいで、俺の一張羅が汚れたぜ？」

このとおりボツたくられてしまい、電柱の影で隠れていた秀樹が

「ちいーでもここで手を貸しちやーでも・・・」

秀樹は猛スピードで走つて、ヤクザの首を腕にかけてそのまま走り去つていった。

「はー怖かつたですー」

すももが安心したので、そのまま進んだ。そのころ秀樹はヤクザを引っ掛けたまま、車の解体工場まで走つて止まるとヤクザがかなり怒つて

「テメー何のまねだあ？」

「いや・・・その・・・」

「何の真似だつて聞いてんだよ!？」

ものすごく怒鳴って顔面を殴りつけたので、秀樹はその場で倒れてしまう。すると

「ん？こいつは……」

ヤクザは秀樹のもっていたケースに気付くと

「う……このケースに何か……」

秀樹は起き上がったってヤクザに質問をした。

「なるほど……お前が俺の仲間を3人も倒した仮面ライダーファイズかあ……」

そのときヤクザは象の怪物、エレファントオルフェノクになる。

「こつ、こんな時に、しょうがない早めに終わらせる！」

そのままケースを開けてファイズドライバーを着けて変身コードを入力して

『STANDING BY』

「変身！！」

『COMPLETE』

そのままファイズに変身したが、エレファントオルフェノクの下半身が4脚でしかも象と同じぐらいにまで大きさになって、4本の足を思いつきり地面に叩くと、その振動でファイズがぐらついた瞬間に腕の大筒でファイズを狙って撃ち出した。撃たれて吹っ飛んだが今彼の頭はちいの事でいっぱいでも急いでいたので、何とか早めにけりをつける為にファイズポインターにミッションメモリーを差して足につけると

『EXCEED CHARGE』

そのままオルフェノクにクリムゾンスマッシュを与え、ファイズはそのまま走り去ってしまった。オルフェノクは体を見ても何とも無かったので追いかけてようとしたが、じつは巨大化した下半身に穴が開いていたことに気づいてそのまま崩れてしまった。

その夜秀樹はちいを探したが、どこにもいなかったのでもしかしたら買って帰ってきてると思ったのでアパートに帰った。

「ちい・・・無事帰ってきてるかな・・・」

とかなり疲れきった声で咳きながら部屋に入ると

「秀樹おかえり。」

ちいが笑顔で迎えた。

「ただいま、ちい。ちゃんと買えたか？」

「うん買えた。」

ちいがそう言っつて紙袋から出したのは、トランクスつまり男の下着だった。

「ちいちゃんと言った。パンツくださいって！」

「え・・・と・・・ふーんがんばったなちい。」

買う物は違っていたが、約束どおりに下着を買ってきたので秀樹はちいの頭をなでるのだった。

次の日、秀樹は下着店の前でドキドキしながら見つめて、勇気を振り絞ってちいの下着を買ってそのまま走り去っていった。

猛スピードでアパートの自分のに着くと泣きながら大声で

「ああああ！変態だと思われた！あの下着屋おねいちゃんに絶対変態だと思われたー！」

「ちい？」

「そもそもパンツなんてコンビニでも買えるんじゃないかー！」

「変態……」

「え！」

言葉に気付いて顔を上げると

「変態、秀樹は変態！！」

「ちっ違うぞー！！ちい！！」

「変態、変態。」

「ぐおおおおお！！」

この夜秀樹の叫び声は、町内中に広がるのであった。



chapter 6 ちいのおつかい（後書き）

今回は、ちいに関係あるのを書くつもりですのでお楽しみに。

今日は予備校がお休みなので、秀樹は自分の部屋で勉強をしていた。その隣りでちいは秀樹を見つめていた。

「秀樹、ファイト!!」

「あー!もう、ほんとに可愛いなーちいは!!」

ちいの応援に癒されて秀樹は元気が出たのだが、玄関から叩く音がしたので駆け寄った。

「管理人です。あの肉じゃが作ったんですが、召し上がりませんか?」

「あつ!ありがとうございます!」

玄関の扉を開ける秀樹の後ろでは、ちいがアルバイト先の店長が貸してくれた、エロDVDとDVDプレーヤーを見つけるとDVDを入れてスタートボタンを押した。

「いつもありがとうございます。管理人さんの料理うまいっすよね。」

「ありがとうございます。あと、これちいちゃんに……」

何かをジーンと見つめている千歳に、その見つめたところに顔を向くと、ちいがDVDを見ながら服を脱いでいた。

「わああああ!!ノノノいや!あの……借りたんですよ!」

泣きながら何とか誤魔化すが

「これ、オカズ。」

ちいがDVDの映像に指を差して千歳にも指を差し

「これもオカズ?」

その言葉に勢い良く扱けてしまう秀樹に

「男の子ですもの、お気になさらずね。」

千歳が微笑みながら、部屋から出て行った。

「あー!ー!ー!ー!また誤解されたのかもしれない!ー!ー!ー!」

またしても町内中に広がるくらい、大声で泣き叫ぶ秀樹であった。

しばらくするとちいを連れて外に出て本屋に行った。初めての本屋にちはきよるきよるするのだった。

「ここは本屋つってな。色んな本が売ってるんだよ。」

「ホン？」

「本ってのはなあ。色んな事が印刷している紙の束で、面白い事とか役に立つ事とか色々書いているんだよ。」

と本について教えるとちはエロ本を手にとって

「ち？」

「いや・・・それもある意味役に立つけど、今はテキストと辞書が必要だ。」

秀樹はテキストと辞書を持ってレジに行こうとしたが、ちいが何か本を見つめていた。(だれもない町)という題名の本だった。

「プレゼントするよ。」

その本を手にとってちいに尋ねる

「プレゼント？」

「ちいにあげるよ。」

「秀樹！！ありがとう！！」

喜んで秀樹に抱きつくちいであった。

へだれもない町……その町には、誰もいなかったの。お家はあるし窓から明かりも見える、でも道には誰もいない。窓から中を除いてみた。ヒトが居た、でもアレといつしよだった。ほかの家もみた、やっぱりアレといつしよだった。この町もほかの町とおんなじだった。アレといつしよは楽しいから。ヒトといつしよより楽しいから。みんなはもう外には出てこない。この町には誰もいない。アタシは旅に出る。ほかの町に行ってみる。誰かがアタシを見つけてくれるといい思う。アタシだけのヒトが。でもアタシだけのヒトがアタシだけを好きになつてくれたら、それがアタシだけのヒトとアタシのお別れの時だ。それでもアタシはアタシだけのヒトに合いたい。そう思いながらアタシは、今日も誰もいない町に行く。ん

買った本を読んでみたら、かなり哲学的な本であった。

「ちい、悪かったな。初めての本がつまらなくて・・・ちい？」

ちいは何か変な感じであったが、しばらくすると直った。そのとき電話が鳴ったので受話器を取って耳に当てる。

「はい、犬井です。」

『国分寺です。秀樹さんですか？』

かかって来たのは、稔であった。

「オレだよ。なんかちいとファイズについて分かったのか？」

『分かったってどうか・・・とりあえず、駅前のハンバーガーショップで待ってます。』

「おう。ちい、オレ出掛けるから。」

するとちいは上着を、秀樹に渡して

「外・・・寒いって、上着が必要だって・・・」

「ちい・・・」

「いってらっしゃい、秀樹。」

微笑んで秀樹に言うと

「・・・ありがとな。」

そのまま秀樹は駅前のハンバーガーショップの前に来て店内に入っ  
て稔を探す、そしてガラスの前の席に制服姿の稔が座っていた。

「その制服、喜与園中学か？・・・幼稚園から大学までエレベータ  
ー式の・・・」

「そうだよ。」

ちよつと悔しがる、秀樹であった。

「で、どうしたんだ急に？ちいの事だろ？」

「そうなんだけど・・・自作パソコンのBBSに書き込んだんだよ。  
ちいさんとファイズの事。」

「ちよつと待て！BBSって何だ？」

「インターネット上にある掲示板だよ。色んな人が書き込まれる。」

「そうなんだ・・・それで知っている奴がいたか？」

秀樹が稔に尋ねた。すると

「いや・・・なんか「俺もそんなパソコン拾いてえー」とか「俺だ  
って仮面ライダーに変身したいぜ。」とかがほとんどだけど、写真  
つきのメールが来たんだ。」

稔がバツクを開けて、何かを写真をプリントしたのを取り出した。  
そこには無数のコードが接続されたちいの姿だった。

「何だこれ・・・」

「どう見ても・・・ちいさんだよね。」

「ああ・・・でもなんで、送り主は？」

送り主について質問した秀樹に稔は残念そうに

「それが・・・アドレスが使われていない物だったから、分からな  
いんだ。」

「なんでそんな事を・・・」

「さあ・・・身元を明かしたくないんじゃないかな？」

そして秀樹は写真を持ってアパートに帰った。玄関にはちいがいて  
「おかえり。」

「ただいま・・・」

疲れきった声で言うと、ちいがポケットの写真に気付いて見つめた。

「あのさ、この写真で・・・ひょっとしてちいか？」

「ちがう。これ、ちいじゃない。」

「そうか・・・やっぱりいたずらか・・・」

何となくホッとすると、秀樹であった。

chapter 7 不思議な絵本（後書き）

次はあのアイテムが登場しますので、次回もお楽しみにしてください。



ある夜の病院で、暗い廊下を看護婦が歩いていると、何か物音がしてその音がした病室に入ってみる。病室のベッドには今日病気で死んだ患者が横になっていた。

「まさか、死人が生き返るわけないし・・・気のせいよね。」

と看護婦が病室から出ると、今度は大きな音がしたので、もう一回の入ると死人が居なくなっていたのだ。

「え・・・と・・・せつ、先生！！先生大変です！！」

慌てて先生を呼びに行く看護婦であった。そして病院の外では、その死人がとぼとぼと歩いていった。

「はい！おめでとう！！」

誰かの声に気付いて、後ろを向くとそこには青い服を着た女性であった。

「・・・・・・・・お前・・・・パソコンか？」

「はい！そしてあなたは、オルフェノクに覚醒したんですよー」

「オツ、オルフェノク！？なんだそれ、俺は今日死んだんじゃないか？」

「落ち着いて、とりあえず車に乗ってください。それから私のことはスマートレディと呼んでください。」

「なんだか分からないまま、スマートレディと一緒に車に乗るのだった。」

「秀樹、おはよう。」

「あーおはよう、ちい。」

朝、ちいは秀樹に朝の挨拶をしたが、なんだか今日のちいは元気が無い事に気付いた。

「どうした？具合とか悪いのか？」

「ぐあい？」

「えーと、つまり頭が痛いとか、お腹がおかしいとか、胸が苦しいとか。」

とちに具合ついて教えた。

「犬井ー俺用事あるから先に行くからなー」

玄関の外で、拡はそう伝えるとそのまま行くのであった。

「あっ！しまった。草加にちいの事、聞きゃあ良かった・・・しようがない予備校の帰りにしよう。」

そして朝食を食べ終わって、予備校に行く準備をすると、ちいが元気なさそうに座り

「悪いな、オレ予備校に行かなきゃならないから、でもちゃんと帰ってくるからな。」

秀樹はちにそう言っ、部屋から出てアパートの郵便受に手紙がある、手にして読んでみた。

「うわっ！これ督促状か。電気代や電話代・・・」

「犬井さん、おはようございます。」  
外で掃除をしていた千歳が秀樹にあいさつをして  
「おはようございます。いつてきまーす。」  
そのまま走って予備校に行くけども、途中でバイクを見かけて  
「はーやっぱりバイクも欲しいなー!。」  
と独り言を吐きながらも、急いでいくのだった。

そして予備校について、授業を受けてその帰りに  
「なあ草加、なんか昨日は大丈夫みただけど、今日は何だか元気が無いみたいなんだ。」  
と元気の無くなっただちの事を話すと  
「充電してんの?」  
「充電?」  
「はーやっぱりしてないんだ。」

溜め息をしながら、そう言う拡に

「え？パソコンで自分で電気を作らないのか？」

秀樹は驚きながら質問をすると

「パソコンが勝手な事はしないだろ。それにあんまり外に出したりしてないだろ。」

「まゝバイトがあるからあんまり外とかは」  
動揺している秀樹に

「しょうがない。すもも、パソコンの充電方法を教えてやって。」  
「あい！！分かりましたです！！」

拡が肩に乗ってるすももに命令すると、すももが画面を手に持って  
「パソコンはソーラーシステムを搭載していて、外出してるだけで  
電気の充電が出来ます。でも日光を受けられない時間が長く続かな  
いばあいは。」

するとすももが、頭の髪留めに手を伸ばして

「この充電用コードを使いまゝ。」  
とコードを出した。

「殆どのパソコンは、耳の中に接続されています。」

「そういや、アダプター持っていなかったな？」

アダプターとは、小型の電源装置で拡はそのアダプターを秀樹に渡  
して

「気をつけるよな。パソコンの充電で、一気にしたら結構いくから  
な。」

「あつ、あ・・・分かったよ・・・色々サンキューな。」

少し混乱しながらも、お礼を言ってバイトに行くのだった。

バイトが終わって、秀樹は急いでアパートに帰って、ちいに充電しようとしていた。ようやくアパートに着いて自分の部屋に入ると、そこには横になっているちいの姿だった。

「ちい！大丈夫か！？ちい！」

驚いた秀樹はちいを抱いて叫ぶと

「秀樹・・・お帰り。」

ちいは微笑んで秀樹にそう言う

「良かった・・・待つてな、すぐ充電するからな。」

さっそくアダプターをコンセントに差し、耳からコードを伸ばして差ししたが、突然バチパチと音と電気が漏れるみたいに光って、そのまま部屋の明かりが消えてしまった。

「え！？何で？どうしたんだ！？」

突然の出来事に大慌てる秀樹だったが、ブレーカーが落ちたと気付いて急いでブレーカーをつけようとしたが全然戻らなかった。今度は拡に助けを頼もうとしたが扉を叩いても出てこなかったから、そこで千歳に頼もうとしても拡と同じ留守だった。

「そつだ電話だ！」

急いで部屋に戻り電話をかけようとしたが

「しまった！！電気と電話料金の支払期限今日までだ！！」

そうつまりブレーカーが戻らないのもそれが原因であり、秀樹はフェイスフォンを使ってみようとしたが、やはりだめであった。

「クソ……」

悔しがる秀樹だけど、ちいがフェイスフォンを指を差し

「ファ……イズ……」

「え！？」

「フェイス……仮面ライダー……正義の味方……正義？  
ちいが笑いながら尋ねる

「正解だ。ちいオレが何とかするから」

ちいのおかげで諦めが無くなった秀樹は、ちいを背負ってバイト先の居酒屋に行きそこで充電しようと考えていたが

「ちよつと待ちな。」

目の前に男性の姿が、じつは昨日の夜スマートレディに連れてかれた死人であった。

「何だ！アンタ！？」

「いや……俺も良く分からないけどさ、何かそのケースを奪ってこいって言われたんだよ……」

その瞬間男性はオコゼの怪物、ステイングフィッシュオルフェノクになる。

「そんな！こんな時に……」

秀樹は声を上げてしまいちいを見つめる

「秀樹……フェイス……」

「ちい……大丈夫……オレが守る！！」

そのまま秀樹はフェイスドライバーを着けてフェイスフォンに入力して

「変身！！」

『COMPLETE』

そしてちいを背負ったまま変身して、フォンバスターをオルフェノクに向けて撃つが、オルフェノクがそれを避けて槍を取り出して突

き刺そうとした。それをかわしてちいを背負って逃げたが、オルフェノクが下半身を魚の尾びれに変形して空を飛びながら追いかけた。「クソーー」

フォンブラスターを撃ちまくったが全部避けてしまい、槍を投げられてつい足を止めてしまいオルフェノクに腹部と顔を殴られてしまった。

「そんなお荷物もってるからだよ！地面に置けばいいのに……」  
「うるさい……お前に関係ないだろ！！」

オルフェノクに質問された秀樹は、大声で質問に応じるがするとオルフェノクが突き刺さった槍を抜いて

「ふんじゃあ一緒に死んで貰おうか！！」  
と襲い掛かってきた。

「だめ……秀樹をいじめないで……」

ちいが呟いた瞬間、空から弾丸が降ってきて、2人は空を見上げるとそこにはロボットが飛んでいて地面に着地した。

「な……なんだ！」

驚くファイズにロボットが近づいてきてちいを抱いてくれた。

「お前……オレの味方？」

質問すると頭を縦に振る

「おいおい、俺を無視するよ。」

オルフェノクはファイズにそう言うが、ロボットが背中にある棒を取って言うてるみたいなのでその棒を抜いてみた。それはまるで剣のようだったので、ミッションメモリーを差した。

『READY』

これが新しい武器ファイズエッジで、次にENTERキーを押した。  
『EXCEED CHARGE』

するとファイズエッジが赤く光って、そのままジャンプして槍ごとオルフェノクを半分に切り付けて、そのまま灰となって崩れてしまった。

「ふー助かったよ。」

ファイズがファイズエツジをロボットの背中に戻して、ちいを抱くとロボットがバイクに変形した。

「すげえ・・・バイクになった。」

変身を解いた秀樹はバイクに触っていると

「犬井さん？」

聞き覚えのある声に気付いて後ろを向くと、タクシーに乗った千歳であった。

「日比谷さん!!」

その後ちいは千歳と一緒にタクシーで、秀樹はさっきのバイクでアパートに帰り、千歳の部屋で充電して貰う事にしました。ちなみにあのバイクはオートバジンで名付けました。



chapter 8 元気をなくしたちい（後書き）

ついにオートバジンが登場しました。次回もお楽しみに待っていてください。

chapter 9 はじめてのバイト

「お先に失礼します。」

バイトが終わってアパートに帰ろうとしたら

「せんぱーいー!!」

と裕美が後ろから秀樹に声をかけた。

「どうしたの？裕美ちゃん？」

「明日、暇ですか？」

「え？いや・・・たしかに明日は予備校が休みだけど・・・」

少し動揺しながら答える秀樹に裕美は

「だったら、明日あたしお弁当作りますから、遊びに行きませんか？」

裕美の発言に秀樹は思わず

「えっ？良いのかよ？オレで？」

「やっぱり勉強がありますか？」

と裕美がガツカリしそうな言葉で尋ねた。

「いや・・・全然、そうだ！オレ、バイク持ってるからそれで。」

「ほんとですか！良かった！」

裕美が声を上げて喜んで

「明日、書店に11時で良いですか？」

「明日11時な、分かったよ。」

秀樹はそのまま帰っていった。しばらくしてアパートに着いて部屋に入ると

「おかえり、秀樹。」

「ただいま、ちい。」

いつもどおり、ちいが出迎えてくれた。

「秀樹、うれしそう。」

ちいが秀樹の様子を見て尋ねると

「分かるか？じつは、バイト先の女の子と遊び行くっつーか、まる

でデートみたな。」

「デートって遊びに行くこと？」

「いや！好意、つまり好きな人と行くのが、デートだよ。」

秀樹のその言葉で、ちいが何か悲しそうな顔をしてしまう。

「秀樹、その女の子、好きなの？」

「好きつつうか、なんちゆうか！良い子なんだよ！」

質問したちにそう答える秀樹だが、ちいはまたもや悲しそうな顔をしてしまうのだった。

翌日、秀樹はオートバジンのバイク形態に乗って本屋に向かって、11時10分前に到着した。時間潰しに本でも読もうとしたが、秀樹が見つけたのは、（アタシだけのヒト〜だれもいない町〜）というこの前ちに買ってあげた本の続編みたいなので読んでみた。

「アタシだけのヒト……やっぱり、この町にもだれもいない。ヒトはみんなアレといっしょ、アレといっしょの楽しいユメからずっと目覚めない。アレといっしょの時間はユメ、ユメみたいなすてきな時間。アレはどんな事もかなえてくれる。ヒトがこうあってほしいようにしてくれる。ヒトがこうあってほしいようにしてくれる。ヒトがこうあってほしいようにしてくれる。アレはヒトじゃないからヒトのユメになれる。でも、アレにもひとつだけ、できないことがある。アレはヒトにはなれない。代わりにはなれても、ヒトにはなれない。それアタシが良く知っているアタシだから良く知っている。アタシは今日もアタシだけのヒトを探す。アタシがアタシだから好きになってくれるヒト。アタシがユメをかなえられなくても好きでいてくれるヒト。でも、もうひとりのアタシがいう。(ほんとうにいるの？そんなヒト。)(いてほしいと思う(本当にアタシだけをすきになつてくれるの？)そうじゃなければ、アタシがアタシであるだけで好きでいてくれないなら、それはアタシだけのヒトじゃない。(本当に？)本当に。(本当にいるの？)本当に。(じゃあ、どこに？)きつと、アタシのすぐそばにそう遠くない場所に、アタシが好きになれるヒトがいると思う。(でもね、そのヒトがアタシを好きじゃなかったらどうするの？)(」

秀樹がつい真剣に読んでるうちに

「犬井先輩！」

誰かが後ろから手を叩いて呼んだ事に気付いて後ろを向いたら

「何だ、裕美ちゃんか・・・」

少し驚いたみたいだった。

「先輩早いですねーあれ？絵本読んでたんですか？」

「いやなんか、不思議な本なんだよ。」

秀樹はレジに来てその本を買うと、2人はオートバジンに乗って出かけた。

その頃ちいは、前買ってもらった本を読んでいると、いきなり窓から外に出て木の上に立つ、そして耳を澄ました。

「呼んでる・・・誰かが・・・」  
と呟くのだった。

秀樹と裕美は公園で弁当を食べて、ボートに乗るのだった。

「こんな所あったなんて、知らなかったなー。」

「公園で遊ぶなんて、何かありがちなって思ってたんですよ。」

「んは事無いよーこついうのスゲー久しぶりだから。」

「良かった！」

秀樹はオールを漕ぎながら裕美と話している

「稔君!？」

別のボートに稔と柚姫が乗っていた。しばらくしてボートを陸に着けて降りた。

「何でここに？」

「散歩だよ。」

秀樹は稔がここに来た理由を聞くと

「ファイズの方は？」

稔はファイズの事を質問した。

「戦いには慣れたし、新しいアイテムも手に入れたから。」

「ふーん、でもそのファイズなだけどさー」

「え？」

突然、稔が何か言いそうな雰囲気になった。

「たしかに、ファイズは人類を守る救世主って言うけれど・・・」

「言うけれど？」

「それを逆の意味で考えたら・・・」

救世主を逆の意味で考えたら、稔の言うとおり考えてみる秀樹だったが、その時気付いた。

「人類を滅ぼす兵器・・・」

そうだ、たしかにファイズは装着者次第で、善にも悪にもなれる。きっとオルフェノクもそのために手に入れようとしている。

「今まで戦っていて全然気付かなかった。」

「そうだね。だから渡しちゃだめだよね。」

2人が話しているうちに

「きゃあああああ！！」

裕美の叫び声が聞こえたので、2人は裕美と柚姫の居る所に走っていくと、そこにはコガネ虫の怪物、スカラベオルフェノクが2人を襲い掛かろうとしていた。

「柚姫！！」

稔は声を上げて秀樹からケースを取り、ファイズドライバーを着けた。

「ちよつと待て！稔君！」

秀樹は止めようとしたけど稔はそのまま変身コードを入力して

「変身!!」

『COMPLETE』

そのままファイズに変身して、オルフェノクに体当たりをした。その際に秀樹は2人を安全な所に連れて行き戻りに行った。

「おいおい、もう息切れか？」

オルフェノクの声がしたので急いで戻ってみると、ファイズがかなり息を吐きながら地面に手と膝をつけた。でも立ち上がって腹部にパンチを与えたが、頑丈な体なので効かなかった。そしてオルフェノクの拳が腹に当たって吹っ飛んでしまい、その衝撃で変身を解いてしまった。

「なんて無茶な事、あとはオレがやる。」

すると秀樹はファイズドライバーを腰に着けて、ファイズフォンに変身コードを入れて

『STANDING BY』

「変身!!」

『COMPLETE』

今度は秀樹がファイズに変身して、フォンブラスターで攻撃したが全然ダメージを受けていなく、サーベルを手にしてファイズを斬りかかった。何とか攻撃する隙を見つけようとしたが、オルフェノクの剣をかわすのが精一杯だった。その時オートバジンロボット形態が助けに来てくれた。

「サンキュー助かった!!」

ファイズはファイズエッジを手にとって、ミッションメモリーを差してENTERキーを押して

『EXCEED CHARGE』

そしてファイズは勢い良くオルフェノク目掛けて走ってき斬りつけた。するとオルフェノクが青い炎を体から出して、灰となって崩れた。

「先輩！大丈夫ですか!？」



裕美がファイズに近づいて尋ねた。

「大丈夫だよ。でも稔君が!？」

「大丈夫、あんまり怪我していないから。」  
稔がそう言っていると柚姫が来て

「なんであんな無茶な事を？」

柚姫が心配そうに聞いてみた。

「心配だったからさ。」

と答える稔であり、秀樹は変身を解いた。

「でも先輩、すごかったですね。」

「えっ、いやーまあね。」

少し照れる秀樹に、裕美と稔と柚姫は少し微笑むのだった。

その頃ちいはまだ木の上に立っていた。

「ちい！何してんだ？」

ちいが下を見ると、部屋に秀樹が居た。

「おかえり、秀樹。」

ちいは部屋に戻ると、秀樹が買った本を渡した。

「前の本の続編、気に入ってるみたいだから。」

「ありがとう、秀樹。」

ちいば秀樹に抱きついてお礼を言ってそして本を読むのだった。

「……でもね、そのヒトがアタシを好きじゃなかったらどうするの？アタシじゃない誰かを好きになったらどうするの？ヒトのココロはアレみたいになじたり増やしたり出来ない。だからヒトが選んだコトを変えるのは難しい。」分かってる。ヒトのココロは変わりやすいけど、変えられないココロもある。特に好きってキモチは簡単に変われない、（だったらどうするの？）そうしたらアタシは決めなきゃいけない。決めて、そしてやらなきゃいけない。アタシともうひとりのアタシで。」

読んでるうちにちいが何か悲しそうな顔をするのであった。

chapter 9 はじめてのデート（後書き）

今回は秀樹以外の方が変身しました。次回はちいがバイトに挑戦します。お楽しみに。



心配そうに秀樹に尋ねる。

「いや……夢だよ。ほら元気だろ！」

それからしばらくして予備校に出かける準備をしていき、サイフを見てみると、中身はカラなので、深く溜め息をしてみよう。

「秀樹何しているの？」

「何度見ても金がねえと思って。」

「金？」

「金があると色々買えるんだよ。」

秀樹は金の事をちいに教えこんで

「バイトを増やす訳にもイケねえしな……」

「バイト？」

「働く事、お金がもらえるの。」

その時ちいは何かを考えると

「ちいバイトする。」

「へ？」

その発言に思わず声を出して顔を後ろに向いた。

「このバイト出来る？」

ちいが雑誌を持っていて、ページに書いているのは（高収入！！ソープ嬢大募集。）秀樹は赤い顔をして口を開いたまま黙り続けていると

「だめー！ー！ー！！／／／」

大声で叫んだ。

「だめ……」

「あつ！その……良いバイトならな。ヤバイバイトはだめだぞ。」

ちいにそう言うと、そのまま出かけた。

予備校が終わって、秀樹はバイトしながら考えていた。

「ちいがバイトか・・・ほんとに大丈夫かな・・・」  
思ってるうちに、公園での稔の言葉を思い出す。

柚姫はね・・・死んだ姉さんに似せて作ったんだよ。だから本当にそっくりなんだけど、プログラムしただけだから同じようにするだけだ。しよせん機械は人間にはなれないって事だよ。

たしかにちいも機械だが、人間のように笑うし悲しむから、本当に人間そっくりだと心に思ってしまう。

ちいはバイトを探そうとして、外に出ると千歳に会って

「お出かけ？」

「バイトして秀樹のためにお金貰うの。」

「そうなの、犬井さんの為にね。気をつけてね。」

「行って来ます。」

そのまま千歳にあいさつをして出かける。町を歩いていくと

「お嬢さん。」

後ろから声をかけられたので振り向くと男性が立っていた。

「あれ？パソコンか？でも可愛いなー何してんだ？」

聞かれたので

「ちいバイト探してるの。」

「バイト？あるある良いのが！！」

とそのまま男性について行くのだった。そしてちいは露出の多い服を着て、窓がや扉が無くて、何箇所か穴が開いた部屋に居た。

「着替え終わった？」

さっきの男性が、床の扉から出てきた。

「でもほんとに可愛いねー！！でもどこのパソコン？自作？だったら作った人に頼んでもう1台を？」

「ちい、作った人知らない。」

頼んでみたら、その言葉を返されてしまう。

「え？だつて持ち主居るだろ？」

「持ち主は秀樹。秀樹はちいを拾ってくれた。でも作ってない。」

「君みたいなパソコンを拾うなんて、本当についてるな！！」

驚きながら、床の扉に潜った。でもまた出てきて

「ちなみにやり方は、ここで服を脱ぐだけだから、簡単だろ？」

とやり方を教え終わると扉を閉めのだった。そしてちいはのぞき穴に近づいて、指を差した。





「草加！何だそのケース？」

「話は後だ。さあ行くぞ。」

そして2人は走って、ちいを探しに行った。

その頃稔は袖姫をメンテナンスしてデータをチェックしていると

「ん？」

「どうしました？」

「ちいさんの情報みたいだ。袖姫ネットを切り替えて。」

「はい。」

すると画面からちいの動画が映っていた。

「これは……ちいさん？」

袖姫は映ってるちいを見ると

「外見特徴は一致しています。」

「でもこれは……どこかの映像か調べられるか？」

「お待ちください。」  
そのまま柚姫は調べてみると  
「どうやら風俗店からみたいです。映像をネットでも有料で流しているようです。」  
そして稔もしばらく考え込んでいき  
「犬井さんこの事知っているかな・・・」  
と呟くのだった。

2人はちいを探しに町を走り回っていくと  
「国分寺稔様からメールです!!」  
すももが踊りながら言い出した。  
「え？国分寺から？読んでみて？」  
「あい！」  
するとすももが無表情になつて  
『突然すみませんが、犬井さん居ます？ちいさんが・・・』

「ちいが!!」

その事に秀樹は大声を出して

「ちいがどうしたって!？」

すももに近づいて尋ねると

『のぞき部屋に居るんだけど、犬井さん知ってるのかなと思って?』

「のぞき部屋……!?!?!」

かなり衝撃的なので叫んでしまい

「お前そんな事パソコンにさせてんのか……」

拡がいやな目をして秀樹を睨む。

「させてねえよ!とこでそののぞき部屋どこだ!？」

大声で聞いてみると

「すももはメールを読んだだけだから分かんねえよ。」

そんなんで秀樹はかなり慌てていたが、拡は何かに気付いて

「犬井……ちよつと来い!!」

すると秀樹の手を引っ張って、人の少ない所に着くと

「草加?何でここに?」

「犬井……気付いていなかったのかあいつらを?」

目の前に居るのは、つくしの怪物エキセタムオルフェノクと、カタツムリの怪物スマイルオルフェノクだった。

「オルフェノク!？」

「マスター怖いです!」

「大丈夫だよすもも。犬井、すももを頼む。」

拡はそう言つと、秀樹にすももを預けた。

「えっ!?待てよ草加!!こいつらはオレが倒すからお前は!!」

「お前はちいちゃんを探すんだろ?」

「え!？」

その言葉にしばらく黙り込むと

「それに俺もお前と同じような力を持ったんだ。」

すると拡はケースを開けるとそこに入ってたのは、携帯とデジガメと双眼鏡とベルトと何か十字の形をした武器だった。



chapter 10 危険なバイト（後書き）

ついに仮面ライダーカイザが登場しました。次回はちいを見つけることは出来るのか楽しみにしてください。

chapter / 11 戸惑いと力

「まさかここで、カイザが出るとはなあ。」

「まあ良い、今からファイズとカイザを奪い取ってやるよ。」  
オルフェノク2体が話をしているうちに

「さあ、早くちいちゃんを助けに行って来い!!」

カイザが秀樹にそう言うと

「でも・・・草加は!？」

「俺の事は良い。ほら早く!!」

2人が話をしているのを気付かれてしまい

「あっ!何こそこそしてんだ!」

と襲い掛かってきたので、カイザが2体を押さえ込んで

「ほら早く!!」

「分かった!後でちゃんと助けに行くからな!!」

秀樹はすももを連れて、ちいを助けに探しに行くのであった。

その頃ちいは、のぞき部屋で男性の言われたとおりに服を脱ぐのだった。

「良いよ～～～その調子～～～どんどん脱いでね～～～」

男性が別の部屋で、監視カメラの映像を見ながら、ちいに言っただった。

「靴下脱いたらブラジャーね。」

ちいはブラジャーを脱ごうとしたが、紐を引っ張ったりして脱げなかった。

「あれ？もしかして着けた事ないの？」

「うん、これした事無い。」

とちいは男性の質問に答えた。

「だったらそれは後にして、パンツをいっちゃって。」

と言われたとおりにパンツを脱いだ。

「脱いだよ。」

「それじゃあ次は足の間に指を入れて。」

その時ちいは突然、ピタツと止まって

「だめ。」

と声を出した。

「は？何で？」

男性が尋ねると

「ちいそこさわっちゃ、だめ。」

「何？良く聞こえないよ？」

でもちいは動こうとしなかったが

「一体どうしたんだ？」

と男性が床の扉から出て来てちいの指を、足の間に入れようとした瞬間、突然のぞき部屋のある階から光ったのだ。



カイザはスネイルオルフェノクとエキセタムオルフェノクと戦っていた。スネイルは粘性ある足で、壁を走ってそのままジャンプしてカイザを殴ろうとしたが、カイザは素早く避けたがエキセタムが地面から出てきて、槍でカイザを斬り付けた。でもカイザは双眼鏡型ポインティングマーカー、カイザポインターにミッションメモリーを差して、スネイルに蹴りを与えると、足がスネイルに突いたままENTERキーを押した。

『EXCEED CHAGH』

音声が鳴ると、光がラインを通ってカイザポインターに到着したら、スネイルの体に四角錐状が突き刺さり、そのままジャンプしてゴルドスマッシュを決めて、スネイルオルフェノクはそのまま灰になると、エキセタムが槍を自在に操って、カイザに槍を突き刺そうとしたが、腹部に蹴りを食らってしまった、そのままふっ飛んでしまい、今度はミッションメモリーを の形をした武器の、カイザブレイガンに差した。そしてエキセタムがそのまま走って来たが、またENTERキーを押して

『 EXCEED CHAGH 』

とまた音声が鳴り、ブレイガンガンモードにして光線を撃つと、エキセタムの体に光の糸みたいに縛り付け、動けなくなったところで、そのままオルフェノク目掛けて突進して斬り付けて、必殺カイザスラツフユを決めると、エキセタムオルフェノクは灰となって崩れた。

「ふーっあつ、ちいちゃんを探さなきゃ！」

とベルトを取って、元に戻ってちいを探しに行こうとしたが、その時何かが現れたのであった。

その頃秀樹は、ちいを探しに走り回っていた。その頃ちいは裸になつてるので、布を体に巻きながら飛び回っていた。そして大通りの時計台に立ち止まると、また目を閉じて耳を澄ました。

「誰？ちいを呼んでるの？」

と呟いたら、目の前に黒い服を着たちいが、現れた。

「アナタは誰？」

「アタシは、アナタよ。」

ちいは、黒いちいに聞いてみると、黒いちいがそう答えた。

「アナタは、まだ押しはいけないスイッチを押しかけたのよ。だからこうして、逃がして上げたの。」

「そうなの？でも、どうしてちいと同じ顔なの？」

「言ったでしょう。アナタはアタシだからよ。」

「ちい、わからない？」

「そうね・・・また別の時に話しましょう。」

すると黒いちいが、消えてしまった。そしてちいは目を開くと、そのまま移動するのだった。しばらくしても、ちいが見つからなくて、秀樹はかなり焦っていた。

「はーはー、ちいはいつたいどこ居るんだ・・・あれ？すもも、おい！どうしたんだ！？」

突然すももが動かなくなった。しかも周りのパソコンも動かなくなってしまう、他のパソコンの持ち主達も困っていた。

「一体どうなってるんだ・・・ん！？」

すると秀樹が、路地裏で何かを見つけて行ってみると、そこに居たのはオートバジンだった。

「オートバジン！！何でここに！！！」

聞いてみると、言葉が喋れなくても、何かが伝わってきた。

「もしかして・・・ちいの居場所が分かるのか？」

するとオートバジンが首を縦に振って、バイクに変形した。さっそく秀樹はオートバジンに乗って走った。すると何かに反応したみたいなので、その反応した所に行ってみると、ちいが電線や電柱や街灯を使って、飛んで進んでいた。

「ちい！！！」

呼んだけど全然反応がしないので、急いで追いかけたが、そこに現れたのは、カマキリの怪物マンティスオルフェノクと、イカの怪物

スクイッドオルフェノクだった。

「おっと、何か急いでるみたいだが。」

「お前の持っているケースを渡したら、通してやるぜ。」

オルフェノク2体が条件を言うと

「お前達に構ってる暇は無いんだ！だから早めに倒す！」

秀樹はオートバジンから下りるとそう叫んで、ファイズドライバーを着けてファイズフォンを持ってそのまま

「変身！！」

『COMPLETE』

ファイズに変身して、フォンブラスターにして撃ったが、スクイッドが持つている、棍棒で弾き返されてしまい、マンティスが鎌をブーメランのように投げると、何とか避けたがスクイッドの棍棒に殴られてしまい、倒れてしまったか、何とか起き上がって、ファイズショットにミッシェンメモリーを差した。

『EXCEED CHARGE』

と音声が出て、スクイッドオルフェノクにグランインパクトを与えたが、その衝撃波とエネルギーが後ろに居たマンティスオルフェノクに当たってしまったので、2体とも体から青い炎が出て灰になって崩れた。

「なっ！！何だ！！これは・・・」

ファイズもかなり驚くのだった。普通なら1体しか効かないグランインパクトが、2体いっぺんに倒したのだから。でもそんな事よりちいを追うのが先なのでオートバジンに乗って、急いでちいが行った所に行くと、ちいが道の真ん中に立っていると、突然倒れたのでつかさず受け止めた。するとすももが意識を取り戻した。

「すもも！良かった、壊れたのだと思ったよ。」

安心して、変身を解いたら

「おーい！」

聞き覚えのある声に気付いて後ろを向くと、拡がサイドカーが着きのバイクに乗って着た。

「草加！どうしたんだそのバイク！？」

「それが、いきなりロボットが現れたと思ったら、バイクに変形したんだよ。ところでちいちゃんは？」

「大丈夫、ちゃんと見つかった。」

そして秀樹とちいはオートバジンに乗って、拡とすももは突然現れたバイクにサイドバッシャーと名付けて、そのままアパートに帰るのだった。

chapter / 11 戸惑いと力（後書き）

ようやくちいを見つける事ができましたが、突然ファイズの力が強くなりました。でも次回、ファイズは普通の強さに戻りますので、お楽しみにしてください。

暗い空間に秀樹は立っていた。何で自分はここに居るのかと、考えながら立っていると

「おい。」

誰かが声をかけられたみたいなので、後ろを向くとそこに居たのは、仮面ライダーファイズであった。

「お前、怖いのか？俺の事。」

いきなりファイズが、質問をしたので秀樹は思わず

「えっ!？」

と声を出してしまうのであった。

「昨日のあの力見ただろ？普通なら1体までだったが、突然1度に2体も倒したのだから自分でも驚いたのだろ？」

ファイズが近づきながら話していたが、秀樹は少し汗をかきながら後ろに下がる。

「お前も分かるだろ？ファイズは人類を救う救世主でもあり、人類を滅ぼす兵器でもある事を……」

「え……」

かなり汗をかきながら小声を吐くと、誰かが秀樹のシャツを掴んでるみたいなので、下を見るとあの絵本のキャラが居た。

「アナタはアタシを、好き？」

そのキャラも質問をした。

「それとも、こわい？」

秀樹は、ただ戸惑うだけだった。

その時、驚いた顔をして秀樹は起きた。

「……夢か……」

どうやらさっきのは夢だったらしく、その隣りにはちいが寝ていた。「しかしびっくりしたな本当に、町が騒ぎになっていて、ちいはピヨピヨと町を進んでいて、さらにファイズがいきなり強くなっているし。」

ちいを見つめながら、心の中で言っていると、何だか心配になってきた。このままちいが目覚めないかもしれないって

「……ちい。」

体を揺すりながら、呼んでみたが全然反応がなかった。そしてちいを抱いて

「ちい！ちい！起きろよ！ちい！」

大声で呼んでいると、ちいは目を覚まして

「……ひでき。」

そして秀樹を抱きしめた。

「良かった……」

と微笑んで呟いた。しばらくすると、秀樹は怒った顔で、正座しているちいを睨む。

「ちい、昨日はどこに行ったた。」

「昨日バイトに行ってた。」

秀樹の質問に、ちいは答える。

「だからヤバイバイトはだめだって言っただろ。」

秀樹はそう叱ると

「うん、秀樹はだめだって言った。だからちいヤバイバイトはしなかった。」



「のぞき部屋は十分ヤバイって!!」

「でもお兄さん、良いバイトってた。」

「そういう人は、必ずそう言うの!!」

と秀樹が声を上げると

「ちい、バイトして秀樹にお金渡そうと思った。」

ちいがバイトをしたの理由を話す。

「え!!!??」

「秀樹、お金で色々買いたい言っただけだった。」

するとちいは悲しそうな顔をして、秀樹のシャツを掴んで

「ちい、間違えた?」

と秀樹に聞いてきた。

「ちい、いけない子?」

悲しい顔と声で聞かれたので、秀樹の顔も悲しくなったが

「いや、ちいは悪くないから、そんな顔はやめろよ。」

大声でちいに言うと

「本当?」

「ああ本当だ。だからオレ、今度ちいに出来そうな探すからな。」

「ありがとう!!秀樹!!」

ちいは嬉しそうに、秀樹に抱きついた。

あれから何日かして、ちいは秀樹が見つけた欧風菓子店で、開店記念フェアでお菓子を配っていた。

「チロル開店5周年記念のフェアを開催中です。お菓子をお買い上げの方にプレゼントを差し上げています。」

ちいは店の制服を着て、微笑みながら宣伝をしていると

「かわいいー！」

「きれいだ・・・」

「あの子パソコンか？」

と人々はちいの可愛さで、チロルのお菓子を買ったのであった。

「ちいちゃん！」

ちいは誰かに呼ばれたので、店に行く。そこに居たのは、チロルの店長の三原弘康だった。

「時間だから、今日はもう上がって良いですよ。」

弘康はちいにバイトの終わりを伝える。

「あがり？」

「終わって良いって事ですよ。」

「ちいバイト初めてだから良く分からない？ちい間違っていた？」心配そうに弘康に聞いてみると

「全然間違ってませんよ。ちいちゃんが一生懸命に働いてくれて本当に助かりました。」

「ちい、お金もらえる？」

「勿論。はい、中に今日1日のバイト料が入ってます。」

とちいにお金の入った封筒を渡した。そして私服に着替えて帰ようとすると

「あっ！そうだ、フェアは今日で終わりなんだけど、ちいちゃんこれからもうちでバイトしてくれませんか？」

「良いの、じゃあ秀樹に聞いてくる。」

「ええ、犬井君が良ければ、明日からでもお願いします。」

「ありがとう店長!!」

ちいは喜んで弘康に抱きついた。

「ちいちゃん、だめですよ。いきなり抱きついちゃ……」

「じゃあ、誰と?」

「え!?誰と……」

すると弘康の顔が赤くなつて

「ちいちゃんの好きな人とか……でしょうか……」

「ちいの好きなヒト……」

ちいは何かを考え始めたがその時

「こんにちは、あれ?どうしたんですか?」

扉から、ヘルメットを被った秀樹が出てきた。

「秀樹!!」

ちいは秀樹に駆け寄ると

「秀樹!ちいここで毎日バイトしても良い?店長毎日しても良いっ

て言った!良い秀樹!??」

「ちよつとちい、ゆつくり話せよ。なっ!」

そして2人はオートバジンに乗って、アパートに着くと

「秀樹、もつとバイトしても良い?」

ちいはもう1度聞いてみる。

「もちもんだとも。」

するとちいはオートバジンに

「ねえ、ちいまたチロルでバイトをしても良い？」  
とオートバジンにも聞いてみると、ロボット形態になって首を縦に振る。

「オートバジンも良いみたいだな。」

「ありがとう、オートバジン。」

今度はオートバジンに抱きつくと、オートバジンの顔が赤くなった。

「あっ！でもあんまり抱きついちゃだめだって、店長が……」  
と弘康の言葉を思い出して、オートバジンの体を離れた。

「でも良いんじゃないの？オートバジンはオレやちいの友達だからな。」

その言葉にまたオートバジンの顔が赤くなって、バイク形態に戻る。  
そして部屋に戻って

「はい、お金。これで秀樹、色々買える。」

ちいは秀樹にバイト代を渡すと

「いや、これはちいが働いたお金だから、ちいが好きなように使って良いよ。」

と言ってちいに返した。

「でもこれは秀樹のために……」

「良いんだよ。だってちいの気持ちだけで十分だよ。」

秀樹はちいを抱いて、言うのだった。

chapter 12 ちいの新しいバイト（後書き）

ちいの新しいバイトの店長は良い人でした。次回もお楽しみに。

ある日、秀樹が散歩をしていると、裕美と出合った。

「あっ！裕美ちゃん。」

「先輩。どこへ行くんですか？」

「ちよつと散歩だよ。」

と会話していると、裕美がパソコンを連れた人を見つめてた。

「裕美ちゃん？どうしたんだ？」

「いえ、ちよつとくやしいと思って、パソコンでどれも可愛いから。」

「

と言って、そのまま帰った。

「どうしたんだろう？」

と秀樹はそう呟いてそのまま歩いて行くと、本屋に近づいて行きその前を通り過ぎようとしたが、（なんでもデキルけど、だれもいない町）というあの絵本の続編を見つけたので、とりあえず読んでみた。

「なんでもデキルけど・・・アレは、なんでもデキル。アレはツクリモノだから。ホンモノよりキレイになれる、ホンモノよりカシコクなれる。ヒトの思いどおりヒトがのぞむままに。どこまでもいつまでも。そして、ゆっくりゆっくりヒノをユメにサソウ、覚めないうメに。(でも、それはヒトにとって、シアワセなことなの?)」  
「アレは、ヒトをシアワセにするために生まれた。(でも、アレといっしょにいてヒトは本当にシアワセなの?誰もいないこの町は本当にシアワセなの?)」

読んでいくうちに、何かを気付いた。

「なんか、これ・・・パソコンの事みたいだな?」  
そう呟いて、買おうと思ったが、とりあえず別の日に買おうと考えて、本があったところに置いて、そのまま散歩を続けた。

スマートブレイン本社の社長室に、なにやら会議をしていた。

「ファイズの次はカイザか……」

「はい、そのおかげで、私達の仲間が10体も倒されてしまいました。」

とカイザの出現に、かなり悩んでいた。

「社長……もしも今度はデルタギアが誰かに渡ったら。」

スマートレディが心配そうな声で社長に聞くと

「心配するな。今、新しいベルトを作っている。」

社長がそう答えると専務が

「しかし……それを早く完成させなければならぬ。」

と悩みながら言う。

「ようするに。」

「ベルトを回収するのが早いかな。」

「完成するのが早いかな。」

「そういう事だろ？」

ソファアに座る男女4人がそれぞれ社長に尋ねる。

「ん？ああそうだな。」

「だったら、俺がファイズとカイザのベルトを回収に行きますよ。」

4人のうちの1人が、社長室から出た。



「良いんですか？社長。」  
専務が心配そうに尋ねると  
「好きにさせておけ。」  
と答えた。

その頃、ちいはこの前もらった、バイト料で秀樹に何か買ってあげようとした。ちいが本屋について、エロ本コーナーの前に立つと、他のお客さんが何か顔を赤くしていた。

「秀樹、これ持ってない。」  
指を差したエロ本を持って、レジに行こうとしたら、あの絵本を見つけたので読んでみた。

「でも、アレといっしょにいてヒトは本当にシアワセなの？誰もいないこの町は本当にシアワセなの？」分らない。けど、何がシアワセかはソレゾレチガウ。ヒトはタヨウだから、ひとりずつチガウものだから。ソトから見ればフコウでもナカはシアワセかもしれない。ヒトのココロはひとりずつ色んなカタチをしているから、ジカンとクウカンの中で、色んなカタチに変わるから、ひとつとしておなじものはない。だから、シアワセのカタチもひとつじゃない。「じゃあ、アサシもシアワセになれる？」なればいいと思う。アタシだけのヒトとアタシだけのシアワセがみつければいいと思う。」

読み終わると、ちいが何かボーラーとしてしまつ。そしてそのままレジで2冊買ってアパートに帰った。

その頃、秀樹は港の近くに来ると、何かを考えていた。

「考えてみたら・・・周りにパソコンが増えたな・・・」  
と心の中で呟いていると

「ピ~~~~ピ~~~~」

口笛が聞こえたので右に向くと、良い筋肉をした黒人男性だった。

「えーとー・・・ハツ、ハロー」

「日本語話せるぞ。」

「は・・・それで・・・アンタ？」

秀樹はその黒人を尋ねる。

「俺の名は、ジャン・ブラウン。まあ」って呼んでくれ。」  
とジャン改めJが自己紹介をする。

「それで、オレに何の御用？」

「ふふふふふふふ、今まで送り出した連中と同じさ。」

その言葉に、秀樹はJからはなれて

「お前もオルフェノクか!？」

「J」名答。」

するとJはワニの怪物、クロコダイルオルフェノクになって、秀樹に近づくので、秀樹はファイズドライバーを着けてファイズフォンを開き

『STANDING BY』

「変身!!」

『COMPLETE』

とそのままファイズに変身してクロコダイルをパンチしたが、全然効かなかった。しかもクロコダイルの両手についている武器、バツクラの猛烈な殴り技を7発も受けてしまい、倒れてしまったが、急いでファイズポインターにミッションメモリーを差して足につけて

『EXCEED CHARGE』

そのままジャンプしてグリムゾンスマッシュを食らわせたと思ったが、クロコダイルはグリムゾンスマッシュを受け止めたのであった。

「え!そんな!!」

ファイズが驚くと、クロコダイルはそのまま地面に叩き付けた。

「な・・・何で!？」

「当然さ、俺はラッキークローバーの1人だ。」

「ラッキー・・・クローバー・・・?」

「つまり、俺も含んだ4人はオルフェノクの中でもエリートという事だ。」

その言葉にファイズは驚いた。ついに幹部クラスのオルフェノクがやって来たという事だ。

「さてと、さっそく回収という事。」

するとクロコダイルがファイズに、キックやパンチを連続して攻撃してきた。ついに倒れてしまうファイズに、クロコダイルがそのま  
ま息の根を止めようとしたら、カイザがサイドバツシャーに乗って  
助けに来てくれた。

「犬井！助けに来たぞ！」

「草加！」

「コイツは丁度良い。カイザがわざわざ来てくれるからな！！」

クロコダイルはカイザに襲いかかるうとしたけど、サイドバツシャ  
ーがロボットに変形して、カイザは操縦席に座ったままスイッチを  
押すと、サイドバツシャーの右腕がミサイルが6本発射されて、し  
かもそのミサイルから小さなミサイルが沢山出てきたので、クロコ  
ダイルは急いで倉庫に隠れたが、ファイズとカイザとサイドバツシ  
ャーが消えていた。

「しまった！逃げられた！！」

クロコダイルが悔しそうに声を上げる。

秀樹と拡は、変身を解いてアパートに帰った。

「本当に大丈夫か？」

「ああ、少しね。」

2人はサイドバスシャワーに降りると

「でもなあ~~~~あんなに強い奴が、あと3人も居るなんて。」

「そうだな・・・これからもつと大変そうだな。」

2人が会話を終わると、秀樹と拡はそれぞれの部屋に入った。

「ただいまー」

「秀樹、はい。」

部屋に入ると、ちいが袋を渡した。

「なんだ？」

「これ、ちいがもらったお金でちいが買って来た。」

「オレに？」

「うん！」

すると秀樹は微笑んで

「そうか、ありがと、ちい！」

と言ってちいの頭を撫でた。

「何かなーー」

秀樹は、ワクワクしながら袋から何かを取り出すと、それはエロ本

だったので思わず扱けた。

「秀樹、これ使える？」

「う・・・まあ、でもせっかくのバイト代だから、ちいが欲しい

物、買ってても良いんだぞ。」

「ちいも買った。」

すると袋からあの絵本を取り出した。

「・・・あ・・・」

秀樹は声を吐いて

「やっぱり、買ってくりゃ良かったな。」

と心の中で思った。

chapter / 13 幸運のクローバー（後書き）

今回はついにオルフェノクの四天王、ラッキークローバーを登場させました。次回もお楽しみにしてください。

ある日の朝、秀樹が予備校に行く前に、自転車置き場に居るオートバジンに、近づいてきて

「なあ、お前、良いオルフェノクって居ると思う？」

とオートバジンに聞いてきた。

「今まではオルフェノクって、悪の怪人だと思ってきたけどさ、元は人間じゃん。もしかしたら心の優しいのもいはずだろ？」

そう言つと、秀樹は予備校に行った。そして予備校について、拡も今朝の事を尋ねてみる

「う~~~~ん・・・確かに良いオルフェノクも居そうだけどさあ~~~~」

「なっ!! そうだろ？」

「でも、本当に居ると絶対信じてるのか？」

「うっ!!!？」

拡の言葉に、少しガツカリしながら黙り込む、秀樹だったが

「コラ、2人ともこれから授業よ。」

2人の目の前に、多香子が教科書を手に持って、立っていたので

「うわぁ! すみません!」

秀樹は驚いて、頭を下げた。

「今度から気をつけてね。」

と秀樹にウインクをして授業が始まった。



ちいは、チロルにバイトしに行ったけど、公園に何か悩んでいる青年を見つけたが、ちいはそのままチロルに行きバイトを始めるがさっきの青年の事で、少し考えていたけれど、昼になったのでそのまま休憩する。

「ちいちゃん。どうしたんですか？何か気になる事でもあるんですか？」

弘康が心配そうに、ちいに尋ねる。

「ちい、公園で何か悩んでいるお兄さんを見たの。」

「え？」

ちいは公園で見かけた、青年の事を話すと

「ちいちゃん、人はね何か悩んで少し強くなるんですよ。だから、心配しなくても良いんです。」

と弘康は優しい言葉で、ちいに言うのだった。その帰り道、ちいはまたあの公園を通り過ぎようとしたが、あの青年がまだベンチに座っていたのだった。でもちいはその青年に近づいて

「どうしたの？お兄さん？」

「うわあっ！？何だ・・・パソコンか・・・」

青年はちいに驚いて声を上げた。

「お兄さん、何で悩んでいるの？」

ちいはその青年に尋ねてみる

「ちよっとねえ、俺、この先どうなるかって事を考えたんだよ。」

「この先？」

「パソコンには、分からないって事だ。」  
青年は立ち上がって、どこかに行った。

その夜、クローバーというバーで、Jが生ビールを飲んでいると、眼鏡をかけた男性がやって来て、Jの隣に座りバーテンダーにカクテルを注文する。

「J、ファイズとカイザを逃したって？」

「うるせいや逸郎。」

とJは逸郎という男と話をすると

「ところで、お前は確か裏切り者の抹殺を任されたみたいだが、どうだ？」

「まあなあ、俺に襲い掛かってくる奴は、当たり前のようにいたが、ちゃんと殺したさ。」

カクテルを飲んで、Jの質問に答えると逸郎は、そのままクローバーから出た。

「彼もがんばってるんだから、貴方もがんばりなさい。」  
とバーテンダーをしている女性が」に叱る。

「分かったよ。冴子さん。」

」は冴子という女性にそう言つと、ビールを飲んでクローバーを出た。

次の日、ちいはバイトが休みなので、またの公園に行つて見ると、あの青年がベンチに座っていたので近づくと

「お兄さん、こんにちは。」

「何だ？またお前か？」

青年は迷惑そうな声を吐くが、ちいはそのまま隣に座る。

「お兄さんの名前は何？」

ちいは青年に名前を聞く

「えっ！？ん・・・木場勇治。」

青年は勇治と名乗る。

「んで……お前の名は？」

「ちい、秀樹がつけてくれた。」

「誰？」

「秀樹は秀樹。」

「わかんねえよ〜〜」

と勇治は缶コーヒーを飲みながらそう言う。

「勇治さん、これ読む？」

ちいは持って来た紙袋から、あの絵本を3冊取り出した。

「いや俺、こんな年で絵本なんて……」

「だったら、これは？」

すると取り出したのはエロ本だったので、勇治は少し顔を赤くして扱ける。

「これは………？」

「秀樹のオカズ。」

「あつそう………絵本にするよ。」

と勇治はそのまま絵本を読むのだった。

「何だこの絵本？こりゃ絵本というより小説だな？」

勇治は観想を言うと

「おい！ちい！」

その声に反応して前を見ると、オートバジンに乗ってヘルメット被った秀樹が公園の外に居た。秀樹はヘルメットを取ると、駆け足でちいに近づいた。

「ちい何やってたんだ!？」

「勇治さん、この人が秀樹。」

とちいは秀樹を紹介するが

「ちい、知らない人には関わっちゃだめだって言っただろ!!！」

秀樹は大声で、ちいに叱る。

「ちよつと待てよ、俺は関わっていないぜ。こつちから話し掛けられたんだ。大体心配だったら、ちゃんと見てるよな!!！」

勇治も怒った声で、秀樹に言い返す。

「何だと！心配だからこうして探しに来てんだよ！」

「だったらその前に一緒にいるって事は出来ないのか！」  
という風に秀樹と勇治の2人は喧嘩をするのだった。

「秀樹、勇治さん、喧嘩はだめだよ。」

でもちいが、2人の喧嘩を止める。

「あつ、ちい。え……と……勇治さんだって、ごめんな。」

「俺も……ちよつと言い過ぎたな。」

2人はそれぞれ謝る。

「これ、ちいが……俺に読ませたいって……  
と絵本とかが入った紙袋を秀樹に渡す。

「ああ、どうも……お前って良い奴だな。」

「お前もな。」

と平和になったみたいだったが

「ピ~~~~ ピ~~~~ ピ~~~~」

突然口笛の音が聞こえた。しかも秀樹の聞き覚えのある口笛だったので、秀樹とちいと勇治は後ろを向くと、そこに居たのはJだった。

「お前はJ！」

「ちい？秀樹の知り合い？」

「まあ、知り合いというか、敵同士だな。」

Jはそう言って、クロコダイルオルフェノクになる。

「あれって!!！」

勇治が声を上げて呟くと

「勇治さん、ちいを連れて隠れて。」

秀樹は勇治に頼み込んで、ケースからファイズドライバーと、ファイズフォンを取り出して

『STANDING BY』

「変身!!！」

『COMPLETE』

ファイズに変身したけど、勇治はファイズを見ると

「あれが！ファイズ！」

と声を上げるが、急いでちいと一緒に離れた。ファイズはファイズフォンを取り外して、106とENTERキーを押して

『BURST MODE』

とそのままクロコダイルに撃つたが、全然効かなかった。するとクロコダイルがバックラーで攻撃させられたて吹っ飛んでしまうが、オートバジンがロボットモードになって、ファイズを受け止める。するとファイズエッジを抜き取り、クロコダイルに斬りかかるが、ファイズエッジを止められてしまいクロコダイルはそのままファイズに殴りかかった。オートバジンが止めようとしたが、殴られて吹っ飛んでしまった。

「秀樹!!!」

公園の外に隠れたちいは、ファイズを見て悲しそうに声を上げる。勇治はちいの悲しそうな顔を見ると、立ち上がって

「待てー!!!」

と声を上げてファイズとクロコダイルに向かって走り出す。

「勇治さん!だめだ!」

ファイズは大声で止めようとするが勇治は馬の怪物、ホースオルフエノクになった。

「えっ!!!」

「何!!!」

ファイズとクロコダイルは声を上げるが、ホースは魔剣ホースソードでクロコダイルを斬りかかった。

「まさかここで、裏切り者にあるとは!!!」

「裏切り者……それじゃあ良い心のオルフェノクか!!!」  
ファイズは目を輝かせると

「犬井!」

すると拡がやって来た。

「草加!」

「待ってる!俺も戦うぞ!!!」

とそのままケースを開けて、カイザドライバーとカイザフォンを取

り出して

『STANDING BY』

「変身!!」

『COMPETE』

そしてカイザになってドロップキックを決め込んだが、決め込んだのはホースだったのでそのまま吹っ飛んだ。

「何すんだ!お前!」

ホースは背中を押さえながら、カイザを怒鳴りつける。

「草加!それは良い心のオルフェノクだ!」

「えっ!ほんとに居たんだ!」

ファイズの説明に、カイザは驚いたが

「コラー!お前ら!こっちを無視するな!」

クロコダイルは大声で怒って、3人に襲い掛かる。

「おっと!そうだったな。」

とカイザはカイザブレイガンにミッションメモリーを差し込む。

『EXCEED CHARGE』

そして光線を撃って動きを封じると、そのままクロコダイルに向かって斬り裂き、カイザスラッシュを決めると、クロコダイルは青い炎を出して灰になって崩れた。戦いが終わったとちいは確認して3人に近づくと、3人は元の姿に戻った。

「まさか・・・本当に良い心のオルフェノクが居るなんて!」

「いや、良い心っていうか・・・人間の心が残っているのが、正解だろ。」

勇治が秀樹の質問に答えると

「でも~~~~ちよつとなあ~~~~」

拡は少し疑っていた。

「おい草加・・・」

「仕方がないだろ?」

「まあね・・・オルフェノクってほんと悪の怪人だから・・・」  
勇治は落ち込んだが

「勇治さんは良い人。秀樹を助けてくれた。」

ちいが勇治の肩を叩いて励ました。

「まっ、信じるしかないな。」

拡は手を出して勇治と握手すると

「新しい仲間にバンザイ!!!」

とすももが出てきて踊りだした。そしてオートバジンも、頭を縦に振ってOKのサインを出した。

「ありがとな。」

勇治は秀樹たちにお礼を言って、みんなで公園を出る。すると逸郎が来て灰の前に立つと、灰が集まって人の形になっていき、クロコダイルオルフェクになりJの姿に戻った。

「後、お前の命は何回だ？」

「後・・・2回だ。」

「そうか、とりあえずクローバーで飲もうか？」

そして2人も公園を出る。



chapter / 14 人馬の憂鬱（後書き）

今回は木場勇治改め、ホースオルフェノクが登場しました。次回を楽しみにして待っていてください。

雲の多い夜、1人の女性が息を切らせながらも、何かから逃げている。その後ろに眼鏡をかけて本を読む男性逸郎が、歩きながらその女性を追っていた。しばらくすると女性はビルとビルの間逃げたが、運悪く行き止まりに来てしまった。

「ここまでだな。いい加減諦めろ。」  
と逸郎が女性にそう言うと、逸郎はムカデの怪物センチピードオルフェノクになると、女性は鶴の怪物クレインオルフェノクとなつてセンチピードに襲い掛かった。しかしその瞬間クレインは目の前にあるワイヤーによって斬られてしまい、そのまま体から青い炎が出て崩れてしまう。

「まったく……我々と同じ道に進めば良かったのに……」  
センチピードはワイヤーを取るとそのワイヤーが鞭になり、そして元の姿に戻ってどこかに行ってしまう。

雲がかかった朝の日、秀樹はジョキングをしていた。もっと強くなつてちいを守るためにと、こうしてトレーニングをしていた。1時間ぐらい近くを走り回ってアパートに帰るとちいが迎えに来てくれた。「ただいま、ちい。」

「おつかれたま秀樹、はい。」

とちいは秀樹にタオルを渡した。そして朝食を食べたら、予備校へ行くのだった。

「今日はバイトは休みだから、帰ったら買い物しよう。」

ちいにそう言つて秀樹は出掛けると、掃除をしている千歳が秀樹に「犬井さん、朝の早くから運動をするなんて、とても元気ですね。」

「まあね。」

秀樹は少し笑いながら千歳に挨拶をして、そのまま予備校で勉強をして勉強が終わつてアパートに帰り、ちいと一緒にオートバジンでスーパーに行き、買い物を買わせてレジに行く。

「あつ！秀樹とちいじゃん。」

と隣りのレジに勇治が居た。

「勇治さん！」

そして帰り道は、3人で歩いていた。

「それじゃあお前、最近トレーニングをしてるんだ？」

「まーな。少しは強くなりたから。」

「ふーん……なあ、少し話があるんだが、別の所で良いか？」

「え！？」

勇治の言葉に少し動揺したが、しかたなくちいを1人で帰らせて人気の少ない林に向かった。

「おい、こんな所で何をするんだ？」

秀樹は不思議そうに勇治に尋ねると、いきなり勇治はホースオルフエノクになつて

「秀樹、俺と戦え！」

とホースはホースソードで秀樹に斬りかかってきた。

「おわつああ！どうしたんだ勇治！？」

「理由なんか無い。」

秀樹はホースソードを避けながら、ファイズドライバーを着けてファイズフォンで変身コードを入力して

「変身！」

『COMP KETE』

ファイズに変身してファイズエッジでホースを斬りかかったが、ホースソードで止められてしまいそのまま斬り合いをしてると、ホースの下半身が馬へ変わり、ケンタウロスみたいな姿になった。そしてその足でファイズを蹴り付けるが、ファイズはファイズポイントにミッションメモリーを差して足に付けて

『EXCEED CHANGE』

そしてホースに向かって、グリムゾンスマッシュをしようとしたが、ホースソードで止められてしまい、それによって2人も吹っ飛んでしまい元に戻った。

「ふー……、お前……手加減してんだな。」

「お前だって……本当に戦う気、無かっただろ？」

寝転がる2人は気付いた事を言うと、笑い始める。

「そのトレーニング成果確かめようと思ってな。」

「だからって、いきなり襲う事はねえだろ？」

と笑いながら起き上がると

「そうだ。これちに。」

すると勇治は秀樹に、（かなえられるユメ〜だれもない町〜）あの絵本の続きを渡した。

「え！？これって。」

「あの絵本の続編みたいだが、ちいのプレゼントに買ったんだよ。」と勇治は秀樹にそう言って、どこかに行ってしまう。秀樹もオートバジンに乗ってアパートに帰った。

「おかえり秀樹。」

「ただいま、ちいこれ勇治さんが！」

ちいに絵本を渡すと、何かイヤな気配を感じた。

「ちい、オレまた出かけて来る！」

秀樹はそのまま外に出て、どこかに走って行った。そしてちいは絵本を読むのだった。

「かなえられるユメ……新しい町にアタシは辿りついた。この町にもアレがいる、アレのいないところはもうない。アレと一緒に居るヒトたち、アレもヒトとおなじくらいたくさんいる。でも、アタシだけのヒトは1人だけ。けれどまたそのヒトが……（アタシはヒトね、なあにどうするの？出せばいいの？アタシをどこへつれてくの？ここがアナタの家なの？どうしてアタシをつれてきたの？それとも……アナタが、アタシだけのヒトなの？）そうかもしれない。でも、このヒトがアタシをつれてきたのは、アタシもアレだからかもしれない。アレはヒトのユメをかなえてくれるとおもっているかもしれない。でもアタシにはかなえられないユメがひ

とつだけある。アタシがそのユメをかなえられたら、アタシは……  
」

「アタシは……」  
絵本を読んでいるちは、体が少し光り始め何かを感じていた。

その頃、拡とすももは町を歩いていると誰かにつけられてるって事に気付いたので、拡は走って建物の中にある駐車場に走って行きそしてその後について来たは」だった。

「何だ？お前……」

「殺された借りを返すんだよ。」

」はそのままクロコダイルオルフェノクに変わると

「お前は！でもあの時確かに！」

「俺はなあ、3つの命を持っていてなあ。お前にやられて後2つだ。」

」

と説明をすると拡はすももをバックに入れてすぐにカイザドライバーを着けて

『STANDING BY』

「変身！」

『COMPLETE』

と拡は仮面ライダーカイザに変身してカイザブレイガンで斬り付けようとしたが、クロコダイルに何発か殴られてしまい倒れてしまうところから蹴り付けられてしまうが、そこにファイズドライバーを着けた秀樹がやって来て

「草加！助けに来たぞ！」

秀樹はそのままファイズフォンを持って

『STANDING BY』

「変身」

『COMPLETE』

そして秀樹はまたファイズに変身したが

「ん！うがあ！あああああ！」

突然ファイズは叫び出し頭を抱える。

「犬井！どうした！」

カイザが叫んでも全然反応がしないが

「ぐわあああああ！」

と獣のような叫び声を上げると、カイザを殴った。

「ぐあっ！どっ、どうしたんだ！」

カイザが大声で尋ねたが、ファイズはクロコダイルに向かって走り出して、殴る蹴るというまさに獣のように襲い掛かった。

「何なんだ！こいつはいきなり！」

クロコダイルはそう呟いてファイズを殴ろうとしたが、ファイズは高くジャンプするとファイズショットにミッションメモリーを差し込んで

『EXCEED CHARGE』

その時ファイズショットを握った腕は赤く光りだして、クロコダイ

ルの腹部にグランインパクトを打ち込むと、地面のアスファルトがめり込んでさらに強い衝撃と突風が吹いてきた。

「こんなんで……俺が死んでたまる……」

クロコダイルがファイズの首を掴むと、その手から青の炎が出て崩れると

「まさか……さっきので……俺の命が2つも無くなったのか!!!」

クロコダイルはそのまま崩れて、完全に死んでしまう。しかしファイズはそのまま暴れ始めたので、カイザはファイズを押さえ込む。

「犬井！止める!!!」

カイザはファイズドライバーを取ると、ファイズは変身を解いて秀樹に戻ると、秀樹はそのまま気を失う。

「どっ、どうなってるんだ？」

カイザも変身を解いて拡に戻り、秀樹を肩に担いでアパートに戻る。すると戦いを見ていた逸郎が

「まさか……」を倒すとは、しかし……あの力は？」

と呟きどこかに去って行く。



その頃、ちいは何かを感じようとしているが

「おい、ちいちゃん。」

拡の声が扉からしたので、玄関に行くと拡が疲れた顔で秀樹を連れて来た。

「秀樹、どうしたの？」

「さーな。でも気を失っているからな。」

すると秀樹は目を開けた。

「あれ！？何でここに？」

秀樹はいきなり自分の部屋に居たので驚くが

「秀樹、良かった！」

ちいが安心して抱きつくと

「お前、ファイズに変身した時の事覚えてないのか？」

拡が今までの事を秀樹に説明する。

「それじゃあオレ、獣みたいに暴れてたのか？」

「いや・・・何か本能が出てきたってみたいだっただぞ。」

すると秀樹は自分に怖くなり始めたが

「秀樹、大丈夫？」

ちいが心配してくれたので、悩んでも何もならないと思いつく。

「大丈夫だよ、心配しなくても良いから。」

秀樹はちいの頭を撫でる。

chapter / 15 本能が再び襲う（後書き）

今回は突然ファイズがまるで本能が開放したみたいに暴れました。それでも次回を楽しみにして待っていてください

これは本当に小さなお話です。ある日の夕方、秀樹はオートバジンに乗って、図書館に来た。

「それじゃあオートバジン、本返しに行くからな。」

と秀樹はオートバジンを駐輪場に置いて、借りた本を持って、図書館に入っていたが、全然出てこなかった。するとオートバジンはこう思った。

「こりゃあ……本を読むのに夢中だな。」

と溜め息代わりにライトが光ったが、それがランドセルを背負った3人の小さな兄弟に目撃されてしまう。そして3人の兄弟は、オートバジンをジーンと見つめるので、オートバジンは少し汗をかいてしまふ。

「ごめん、オートバジン。面白い本があったから。」

秀樹が新しい本を借りて出てきたが、駐輪場に置いてきたオートバジンは居なくなっていた。

ここは少し大きめの3人兄弟の家で、そのリビングにオートバジンがロボットの姿になって、正座して座っていて、人兄弟はまだオートバジンを見つめていた。

「ねえねえ、貴方はなんてロボットなの？」  
最初に長女が尋ねてきて

「なんて名前なの？」

次に次男が尋ねてきた。

「お兄ちゃん、これ家に置こう!!」

いきなりそんなこと言われて、驚くオートバジンだったが

「だめだよミヨ、ユウ。コイツきつと持ち主が居ると思うよ。」

と長男が妹と弟の、ミヨとユウを止めた。

「それに、家はパソコンがあるだろ。」

「でも、シンお兄ちゃん、パソコンはもうちょっと大きくなるまでだめだつて、お父さんとお母さんに言われたよ。」

とユウが兄のシンにそう言つと、少し部屋の雰囲気が暗くなってきて  
「どうせパパとママも、お仕事で全然帰ってこないじゃん。」

ミヨが悲しそうな言葉でそう呟くと、オートバジンはミヨに近づいて頭を撫でる。

「コイツ慰めるんだよ!!」

シンが声を上げると、ミヨは笑ってオートバジンに抱きつて

「ありがとう!!」

とお礼を言つと、オートバジンは少し顔を赤くする。

「オート！どこだー！？」

その頃秀樹は、拡と勇治と協力して、オートバジンを探していた。

「居たか！？」

「全然居なかった！？」

「今度はあつちだ。」

と急いで探していたのだが、しばらくしてアパートの秀樹の部屋に帰っていった。

その頃、オートバジンは家を出ることにした。

「じゃあ、元気でな。」

シンが寂しそうな声で言うので、なんだ帰り難くなってきて

「また、会おうね。」

今度はユウが悲しい声を出したので、ますます帰り難くなって、しかもミヨが涙を流した。そこでオートバジンは3人を担ぐと空を飛んだ。

「うわー高ーい!!」

「町がまるで星みたいだ!!」

「凄ーい!!」

3人は声を上げて喜ぶのだった。しかしそれを目撃した人がいた。

「見たか？修太郎？」

「ああ見たぞ、俊彦。」

「コイツは高く売れそうだな？」

「よし、後を追うぞ！」

と2人の泥棒が声を上げて後を追うのだった。

そして秀樹達は、何故オートバジンが居なくなっただか、話をしていた。

「秀樹、オートバジンは見つかる？」

ちいは心配そうな顔で、秀樹に尋ねた。

「大丈夫、ちゃんと見つかるよ。」

秀樹はちいの頭を撫でていうのだが

「もしかして、家出かもしれません!!」

いきなりすももが声を上げるのだった。

「たしかに、そうかもしれないな。」

「同感だ。」

拓と勇治の言葉に

「ちよつと待て！オレのせいでオートバジンは家出したってか!？」

秀樹は大声で怒鳴りつける。

「だつてお前、さんざんオートバジンに乗ってんのに、洗車して無いじゃん。」

「それにメンテナンスもしてないだろ？」

と拓と勇治が秀樹にそう言うと、凶星みたいなので黙り込むのだった。

その頃、オートバジンと3人兄弟は、公園で池に映った月を見ていた。

「きれいだね。」

ミヨはオートバジンに尋ねると、あの泥棒の修太郎と俊彦が歩いて来た。

「誰？」

「俺達はな、そのロボットの持ち主さ。」

「だから、黙って渡して貰おうか。」

修太郎と俊彦が3人に頼み込むと

「怪しい。」

「きつと盗む気だよ。」

シンは2人を疑い始めた。

「しかし、よく出来てるな。パソコンと同じ機能もあるかな？」

修太郎がオートバジンに触ろうとすると、オートバジンは修太郎の頭を掴んで投げ飛ばす。

「ああ！！お前何を！！」

今度は俊彦も掴んで、修太郎を投げた所に投げる。

「いててて、ん？ぐわあ！！」

修太郎が起き上がるうとしたが、飛んできた俊彦にぶつかってしま  
う。

「今だ！逃げろ！！」

そのまま逃げようとしたが、投げ縄が飛んできて、オートバジンの腰に引っ掛けてしまう。

「あはははははははは！！どうだ！！」

修太郎は笑いながらそう言うが、オートバジンはバイクに変形した。

「何、変形した！？」

俊彦が声を上げるが、シンは変形したオートバジンを見て

「乗れって事？」

と尋ねるとオートバジンは頭を縦に振ったので、3人は急いで乗るとオートバジンは走り出したので、修太郎と俊彦は縄を持ったまま引きづられてしまうのだった。

「わああああ！！修太郎！その縄放せ！！」

「そんな事したら、腕とか足とか折れるかもしれないねー！だろ！！」

2人は声を上げるのだが、オートバジンはそのまま町の路地裏を走り続けたが、途中で川が流れたのでオートバジンはその川を飛び越えた。でもあの2人は縄を放してしまったので、川に落ちて



「助けてー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」  
と流れてしまうのだった。

「やったー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」  
そして3人は声を上げて喜んだ。

その頃、秀樹達はまだ、オートバジンの事で話していた。

「でもなあ、オートバジンが居なかったら、代わりの乗り物に乗る  
しかないな。」

「代わりのって、例えば？」

と秀樹は拡に尋ねてみると

「ん………チャリンコとか。」

「え？」

その発言に、秀樹は想像した。自転車に乗って来る仮面ライダーフ  
アイズ、とてもかっこ悪いので

「絶対いやだ。」

と言っのだった。

その頃オートバジンは、3人の子供達と一晩中、空を飛んで遊んだのだった。

「わーーーーーい!!」

「楽しーーーーい!!」

「あはははは!!」

子供達が大喜びすると、オートバジンも喜ぶのだった。そして朝になると3人の親が帰ってきた。

「ただいまーシン、ミヨ、ユウ、帰ってきたよ。」

父親が子共部屋の扉を開けると、3人は気持ちよさそうに寝ていた。

「あらあら、まだ寝てる。きっと楽しい夢を見てるのね。」

母親がそう言うと

「今日は土曜日だし、このまま寝かしてやるわ。」

そのまま静かに扉を閉めた。

そしてオートバジンはアパートに帰って、秀樹の部屋をのぞくと、秀樹達は寝ていたので、窓を外して入り込んで、秀樹達に毛布をかけて、外に出て窓を元に戻して、駐輪場でバイクに変形して「やっぱり放っておけないな、コイツらは……………」と心の中で呟いて、そのまま寝るのだった。

chapter 16 小さな小さなお話（後書き）

今回はオートバジンのお話で、最遊記RELOAD風にしてみました。そのまま次回も楽しみにしてください。

ある日、秀樹はオートバジンを洗車していた。また家出しないようにと、さらにいつも乗せてくれた感謝を込めての、洗車であった。

「どうだ？バジン。気持ち良いか？」

「うん、気持ち良い。」

オートバジンはライトでサインする。そこにちいがタオルを持ってきて

「はい、秀樹。」

とタオルを秀樹に渡す。

「ありがとう、ちい。」

秀樹はちいにお礼を言って、そのタオルで顔を拭くと、千歳がやって来た。

「犬井さん、大変ですね。もし終わったら私の部屋でお茶でも？」

それを聞いた秀樹は

「はい！すぐに終わらせます！！！」

とめちやくちややる気が起きた。そしてオートバジンを洗車し終わると、さっそく千歳の部屋に行った。

「おじゃまします。」

「いらっしやい。犬井さんにちいちゃん。」

秀樹とちいが入ると、千歳がお茶とお菓子を用意してくれたた。

「すみません、こんなに汚れて……」

「良いのよ別に……」

楽しく会話しながらお茶を飲んでると

「そうだしつは犬井さんに、渡したい物があるんです。」

と千歳は、立ち上がって戸棚から、代わった形のリストウォッチを取り出して、秀樹に渡した。

「え！？いやっ良いですよ！！！」

「良いのよ。貰って。」

こうして秀樹は、そのリストウオッチを貰う事になった。それから楽しくお茶を飲んで、しばらくしたら自分の部屋に戻ったが、その時電話がなつたので電話にかけた。

「はい、犬井です。」

『犬井さん？』

「稔くん！！」

電話にかけてきたのは稔だった。

「一体何かごよう？」

『じつはファイズとカイザについて分かった事があるんだ。あのハンバーガーショップで待つてるから。』

稔は用件を言つと切つたので、秀樹はさっそく出かける準備をした。

「じゃあちい留守番たのんたぞ。」

「うん、秀樹いつてらっしやい。」

そのままオートバジンに乗って、駅前に向かった。

そしてハンバーガーショップに到着して、中に入り稔を探していると、稔と柚姫が座っている席を見つけたので、近づいて来て座る。

「稔くん！ファイズについて分かった事って？」

「犬井さん、じつはファイズギアやカイザギアの他に、デルタギアっていうもう1つのベルトが存在するんだ。」

その稔の発言に

「なっ、なんだって!!!?」

と大声を出して叫んで、立ち上がる秀樹だったが

「あの……犬井様？みなさんの迷惑ですよ？」

柚姫の言葉を聞くと、周りの人たちが秀樹にいやな目をした事に気づいたので、顔を赤くなって静かに座る。

「それじゃあ……オレや拡を含めて、仮面ライダーって3人存在するって事？」

秀樹は小さな声で尋ねる。

「まあね。それである噂もあるんだよ。」

「噂？」

「その3つのベルトは、オルフェノクの王を守るために作られたって言うんだ。」

「オルフェノクの王？」

その稔の言葉に、秀樹はまた混乱する。

「なあ……オルフェノクの王ってなんだ？」

「じつは、オルフェノクは寿命が短いのです。」

「寿命が短い!？」

すると今度は柚姫が秀樹に言う。

「はい、急激な進化は体の細胞を壊すので、彼らの命は短いのです。」

「

でもそのオルフェノクの王は、そんなオルフェノク達の運命を変えられることが出来るって言われているんだ。」

と稔と柚姫は秀樹にオルフェノクの秘密を説明する。

「それじゃあオルフェノク達がベルトを狙ってるのは、その王を守る為なのか。」

秀樹が納得すると稔は秀樹に

「そういけば、良いオルフェノクが居たって草加さんから聞いたけ

ど？」

「ああ、木場勇治って名前なんだ。」  
すると稔は考えて

「まあ……本当に良いオルフェノクなら良いけど、とりあえず気をつけてね。」

と秀樹にそう言つと、そのまま稔と柚姫は店から出たので、秀樹もそのまま外に出る。

「なんだよ気をつけろって、勇治は本当に良いオルフェノクなのに……」

どつやらさっきの稔の言葉を気にしていた。

その頃、オープンカフェに、男女2人がコーヒーを飲んでいた。その2人は琢磨逸郎と影山冴子であった。

「それじゃあJがやられたのは、そのファイズの暴走って事？」

「間違いない、まるで獣が怒り狂ったかのようにな。」

2人はJが倒された事について話していた。

「それで……新しいベルトは？」

冴子は新しいベルトを聞いてみると



「まだ全然完成しないらしい。」  
と逸郎は冴子にまだ完成してない事を伝える。  
「これからファイズに会って来る。」  
立ち上がった逸郎は冴子に言う。  
「ちよ、大丈夫でしょうね？」  
「心配するな。仲間を連れて行くからな。」  
と冴子に言うとそのまま行ってしまふ。

その頃、秀樹はしばらくオートバジンで走っていると、陸上競技場の近くに着いたので、オートバジンを降りて、その周りを歩きながら考えていた。

「勇治はオルフェノクだけど良い奴なのに……やっぱりオルフェノクは敵……でもアイツは……」  
秀樹が心の中でぶつぶつ言っていると

「へ……君がファイズか？」  
誰かの声だったので後ろを向く秀樹であったが、そこに居たのは逸郎とサングラスをした2人の男だった。  
「なんだアンタらは？」

秀樹が逸郎に尋ねると

「俺は……お前のベルトを返しに来た物だ。」

すると逸郎はセンチピードオルフェノクに、そして他の2人はサソリの怪物、スコープιονオルフェノクとナマコの怪物、シーキュカンバーオルフェノクになる。秀樹は急いでケースを開けてベルトを巻くと

「しかしこんな奴が、我らラッキークローバーの1人を倒すとはな。」

「えっ!? それじゃあお前も!?!」

「そうだ、俺も」と同じラッキークローバーで名は逸郎だ。」

まさかここでラッキークローバーのメンバーに出会ってしまった秀樹だったが、そのままファイズフォンに変身コードを入力して

『STANDING BY』

「変身!」

『COMPLETE』

そして秀樹はファイズに変身すると、センチピードは鞭でスコープオンはフレイルで攻撃してきたので、ファイズはすぐに避けシーキュカンバーの腹を殴ったが、軟質な体のため効いていなく、シーキュカンバーが殴られたがすぐに立ち上がり、しかしスコープオンの頭部にある3つの針を飛ばしてきたので、ジャンプして避けて競技場の観客席入り口の近くに飛び移る。そこでファイズポインターにミッションメモリーを差し込んで足に付けると、センチピードの鞭に縛られてしまい。しかもそこにスコープオンがフレイルで攻撃されて、さらにシーキュカンバーは手の平から溶解液を出してファイズに投げってきたが、それを利用してファイズは鞭を溶かして、スコープオンとシーキュカンバーをそのまま投げた。その時

「使って。」

「ん?」

どこからか声がしてきた。

「ファイズアクセルを使って。」

「ファイズアクセルって……これか!？」

ファイズは腕についてあるリストウォッチの事に気付いて、そこにあるアクセルメモリーを抜いてファイズフォンに差し込む。

『COMPLETE』

するとファイズの胸のアーマーが開いて、肩の定位置に収まると、黄色い目が赤くラインが銀色になって、高速形態アクセルフォームに変身する。そしてファイズアクセルを押しすと

『START UP』

ファイズは超高速で飛び降りてきたが、その時スコープオンがスコープオンニードルを撃つが、今のファイズにとって遅くすぐに避けて、3人を殴りつけてシーキュカンバーを蹴り付けると、またジャンプして最初にシーキャンバーに次にスコープオンにグリムゾンスマッシュをやった瞬間

『3 2 1 TIME OUT』

ファイズの高速移動が終了すると、2人のオルフェノクは青い炎を出して崩れていった。

『REFORMATION』

と元のファイズの姿に戻ったがセンチピードが姿を消していた。

「しまった!逃げられた……」

ファイズはファイズドライバーを外して、秀樹の姿に戻ると

「しかし、すげえな……でもなんで千歳さんが?」

秀樹は考え込むと

「もしかして……オレと同じように拾ったのかな?」

と秀樹はそう思うと、オートバジンに乗り帰っていった。

今回はファイズがアクセルフォームに変身しました。次回を楽しみにして待っていてください。

夏の暑い日、稔から海辺の別荘に招待してくれた。だから秀樹とちいはいはもちろん、拡とすももと千歳と勇治が行く事になった。ちいとすももと稔と柚姫は千歳の車で、秀樹はオートバジンで拡と勇治はサイドバツシャーで別荘に向かった。

「しかし稔くん、別荘持つてるなんて凄いな……」  
オートバジンに乗っている秀樹は、サイドバツシャーに乗る拡に尋ねると

「国分寺はな、毎年夏になると別荘に行くんだよ。」

「本当に金持ちなんだな……」

とサイドカーに乗る勇治が呟くのだった。

「秀樹……!!」

「マスター……!!」

するとちいが車の窓から顔を出して手を振り、すももはちいの頭を乗っかって手を振った。

「ちいちゃん、窓から顔を出しちゃ危ないですよ。」

車を運転している千歳が、ちいに優しく注意する。

別荘に着くと、さっそく水着に着替えて海に向かった。

「秀樹、本当に海は広いね!」

「ああそつだよ。海はなましく広いんだよ。」

ちいちは千歳から貰ったスクール水着を着て、初めての海に驚いた。

「本当に海は綺麗ですね。」

白い水着を着て日傘を持った千歳が来ると、秀樹はつい見とれてしまつた。

「なんだ秀樹？なに見とれてんだ？」

すると勇治がからかうみたいに秀樹に言うつと

「なつ！なに言つてんだよ！！！」

慌てるように声を上げる秀樹であつた。

「あつ！マスターあれ見てください！！！」

「ん？あつ！！！」

浮き輪を持ったすももの指を差した方に秀樹達は顔を向くと、オートバジンが砂で兔をサイドバツシャーが砂で猫の像を作つていた。

「バジンが作つたのか？うわー！ー良く出来てるな！！！」

「可愛いね。」

「サイド、この手で上手に作つたな！！！」

「凄いです！パーフェクトです！！！」

「今にも動きそつだな。」

「本当に可愛いですね。」

秀樹達に褒められて顔を赤くする2体であつた。

「秀樹！遊ぼうー！！！！！」

「分かつたよ！！ちい！！！」

そのまま海に入ると、秀樹とちいは楽しく水掛け合いをして、拡とすもものはのんびりと海に浮かんで日光浴をして、勇治は水中眼鏡で潜水して泳ぎ、オートバジンとサイドバツシャーは砂浜で昼寝をする。

「国分寺くん、私まで招待してくれて、ありがとうございます。」

千歳は本を読む稔にお礼を言うつと

「いや・・・お礼なら頼んできた犬井さんに言つてよね。」

稔は返事をするつと千歳は微笑んだ。しばらくしてスイカ割りが始ま

った。

「よーし、まずはオレから!!」

目隠しをして棒を持って、やる気満々に叫ぶ秀樹だったが、割ろうとした時転んでしまって失敗してしまい

「あははははは!! 失敗失敗!!」

すももが大笑いをするのだった。

「しょうがない、だったら俺が!!」

拡もやる気満々に言うが失敗してしまい

「どうやら、この俺しか居ないようだな。」

と勇治が自慢するみたいに豪語するが結局失敗してしまう。

「ふふふふふ、だったら本気を見せてやるぜ!!」

そう言うのと勇治はホースオルフェノクになる。

「本当にオルフェノクなんだ!？」

ホースの姿を見て稔と千歳と柚姫は驚いたが

「大丈夫だから!ほんとに良いオルフェノクだから!!」

秀樹は慌てた声で、稔と千歳と柚姫に言うのと、ホースはスイカから長く離れて目隠しをして棒を持つと、助走をつけてジャンプして宙返りをして、そしてスイカを割った。

「えっ、ええええええええええ!!」

あまりのスゴ技に秀樹と拡はただ声を上げて

「凄いよ!勇治!!」

「凄いです!100点満点です!!」

「ほんとですね!」

とちいとすももと千歳がホースを褒めて、その割ったスイカの半分を千歳が丁度良い大きさに切っておいしく食べた。

「あああああああ、旨い!!」

「やっぱりスイカは良いよな!!」

「ほんと!ほんと!そうだよな!」

と秀樹と拡と勇治は喋りながら食べると千歳は少し笑うのだった。そして夕方になると浴衣に着替えて花火を楽しんだ。

「綺麗だね、秀樹。」

「ああそうだな、ちい。」

線香花火をするちいに、微笑む秀樹であった。

次の日の朝、勇治は秀樹に何かクリームみたいな物を渡した。

「勇治、何だこれ？」

「パソコン用の酸化防止クリーム。つまりパソコン専用の日焼け止めみたいなものさ。」

すると拡がやって来て

「塩水や潮風は、精密機械の天敵だからな。まあ防水加工はしているけど、一応塗つとけよ。」

と秀樹に教えたが

「ああ……でも……」

少し顔を赤くなるが

「私が塗りましょうか？」

千歳が来てくれたのでお願いして、海に来ると秀樹はちいに海に住む生物を教えた。

「良いかちい、これは？」

「カニ。」

「よし！じゃあこれは？」

「ヒトデ。」

「当たり前だ！！」



と秀樹がちいを褒めると拡が来て

「お前、泳がないのか？」

と尋ねると秀樹は顔を暗くして

「泳げないんだよ……オレ……」

秀樹が悲しい声で拡に言うと

「秀樹、あれ！」

ちいの指を差した方に顔を向けると、イルカが群れで泳いできた。

「イルカ……本物のイルカだー！！！」

初めてイルカを見たので大声で驚く秀樹で

「おい！近くで見に行こうぜ！！！」

勇治は秀樹達に言うが

「いや……だからオレ泳げないんだって……」

秀樹のその言葉に少し空気が重くなるが

「だったら、家のクルーザーで見に行く？」

「え？」

稔の発言に秀樹と勇治は声を出して、そのまま柚姫が運転するクルーザーに乗ってイルカを見に行き、オートバジンとサイドバツシャーはそのまま昼寝した。でもそこに麦わら帽子を被った男が砂浜に

来て

「あれだな？ファイズとカイザは。」

そう言うと男はトビウオの怪物、フライングフィッシュオルフェノクになって、鎖を手につつそのまま海に入ってクルーザーを追いかけた。

その頃、秀樹は稔がクルーザーを持っていた事に驚いて、また少し悔しくなるが

「あつ、イルカ!」

「本当にこんな間近でイルカだ!」

「すごいです!かわいいです!」

「ああ!ほんとすげえな!」

「あつ!今こっち向いたぞ!」

と元気良く泳ぐイルカを見て、千歳や稔と柚姫が微笑んで以外が叫んだ。でも勇治は何かの気配を感じると

「悪いが止まってくれ!」

大声で稔に言うのでクルーザーを止めた。

「どうしたんだよ?勇治?」

と秀樹が気になって勇治に尋ねると

「お前……気付かないのか?」

「え?」

すると海のほうから何か飛んできたので

「頭を下げるおおおおおおお!」

勇治の声に秀樹達は頭を下げると、クルーザにモリが刺さっていた。

「これは……まさか!」

拡が海を見ると、フライングフィッシュオルフェノクが、巨大水中銃を持つて海から顔を出していた。

「まったく、せつかくの休日を!」

すると拡はケースからカイザドライバーを出して腰に着けると

「ちょっと待て!相手は海に居るんだぞ!」

「大丈夫!カイザとファイズには防水加工してるから海水でも泳げる!」

と秀樹に言うとカイザフォンに変身コードを入力して

『STANDING BY』

「変身!」

『COMPLETE』

そのままカイザに変身した瞬間、フライングフィッシュが鎖を投げてカイザの体を巻きつけると、海の中に引きずり込んだ。

「草加!!!」

「マスター!!!」

秀樹とすももが叫んだが反応が無かった。水中ではフライングフィッシュが鎖を引っ張ってカイザを近づけると、そのままカイザを殴ったり蹴ったりした。

「あはははははは！防水加工はしていても、水中じゃあ上手く動けないだろう!!!」

フライングフィッシュが笑うが、カイザは隙を見せて腹を蹴り、鎖を引き千切って1度水面に行こうとしたが、フライングフィッシュに体を掴まれて、顔が出たり沈んだりしていた。

「秀樹!?!」

「ちい……でもオレ……そうだ!!!」

何かを思いついた秀樹は、ファイズドライバーを腰に着けて変身コードを入力して

『STANDING BY』

「変身!!!」

『COMPLETE』

そのままファイズに変身して大声で

「草加!!! オルフェノクの頭を少しでも良いから、海から出してくれ!!!」

とカイザに頼んだ。

「何する気だ?」

「まあ、見てろって!!!」

するとファイズはファイズアクセルから、アクセルメモリーを抜いてファイズフォンに刺して

『COMPLETE』

そしてファイズはアクセルフォームになると、カイザがフライング

フィッシュの頭を水面から出すとファイズはボタンを押して

『START UP』

と超高速で海の上を走り、フライングフィッシュの頭を掴み、そのまま砂浜に到着した瞬間、フライングフィッシュをぶん投げた。

『REFORMERTION』

ファイズは元に戻り

「陸に出ればこっちの物だ!!」

「んだと……コラア!!」

フライングフィッシュが立ち上がって水中銃でモリを何発か撃ってきたが、ファイズはそのモリを走りながら避けて弾いて

「これは草加を殴った分と休日を台無しにした分だ!!」

ファイズがそう叫んでフライングフィッシュを殴って蹴って、ファイズポイントにミッシヨンメモリーを刺して

『EXCEED CHARGE』

そのままジャンプしてグリムゾンスマッシュをやって、フライングフィッシュオルフェノクは灰となって崩れた。それから海を見るとカイザが無事にクルーザーに戻って安心して

「おーい!ちい!!」

と大声で手を振ると

「秀樹ー!!ちいも行く!!」

「え!?!」

ちいがそう言うとジャンプして海に飛び込んだ。

「ああああああ!!?ちい!!!ちい!!!ちい!!!ちい!!!?」

ファイズは慌てて海に入ってちいを助けに行く。それもクロールや平泳ぎが混ざったような泳ぎをしたが、その時ファイズがあることに気付いた、それはもう足が届かない深さに来てしまっ

「あつ!あつ!……あああああああ!!」

そのまま叫んで沈んでしまった。でも沈んだ時ファイズが見たのは、イルカと楽しく遊んでるちいであった。するとイルカがファイズとちいを背中に乗せてクルーザーまで送ってくれた。

夕方になると、ベッドで寝てた秀樹は目を覚ました。

「あれ！？オレは……」

「イルカさんが助けてくれたよ。」

隣に居たちいが秀樹にさっきの事を教えた。

「しかし……泳げないのに来るなんてな。」

「本当にお前……すげえ根性だな。」

「でも良かったわね。」

「ほんとイルカが助けに来るなんて奇跡だよ。」

とみんなが秀樹に言った。

「ねえ秀樹、また明日イルカさんに会えるかな？」

「ああ、きつと会えるさ。」

抱きついてきたちいに秀樹は優しく頭を撫でた。

chapter / 18 ちいの海水浴（後書き）

今回はちい達が海水浴をする話にしてみました。次回を楽しみにしてください。

暑い夏の日の朝、あまりに暑いため、秀樹はボーっとしながら予備校に向かう。

「あーっつい・・・でも建物の中はクーラーが効いているから。」

と秀樹がそう期待を持って予備校に到着するが、予備校で秀樹が居る教室は今クーラーが故障していて、点検をしているため外と変わりが無かった。そのため生徒はやる気が無くてボーっとしてしまう。

「もうすぐ修理が終わるから、この時間だけでもがんばろう。」

多香子が生徒に言うが、全然元気というのが無かったが

「だったら、これからアタシが問題を出すから、それに答えられたらここに居る全員にカキ氷をご馳走してあげる。」

それを聞いた生徒達は

「それほんとーっ！？」

「うわーっ！やったーっ！！」

「俺いちごがいい！」

「アタシはメロン！」

と全員が元気になった。

「コラ、答えられたらって言うてるでしょ？さーっ！と・・・」

多香子は問題を答える生徒を探して

「じゃあ、犬井君ね。」

「えっ!？」

といきなり自分に当てられたので、なんとかみんなの期待にこたえようとした秀樹だったが

「すみません・・・解りません・・・」

暑さで問題を聞いてなくて、全然解らなかったので秀樹がそう言った瞬間、生徒達はまたやる気をなくした。

「しょうがないな~~~~じゃあここを復習するよ~~~~」

と多香子は問題を復習をするが、秀樹は少し疲れてしまうと、扉から拡か出てきて、こっそりと秀樹の席に行き座った。

「草加！遅かったな？」

「まーな、でも暑いな・・・」

「クーラーが故障したんだよ。」

秀樹が拡に説明をしたら

「なあ・・・時間あるか？」

「あるけど、何か？」

「英語のノート写させてよ。」

「ああ、良いけど・・・」

と拡と約束をする秀樹であった。

それから授業が終わって、ハンバーガーショップで秀樹は拡に、ノートを写したりしていた。

「なあ・・・これなんだ？」

「え？しだけど？」

「これがしねえ・・・すもも」

といきなり拡はすももを呼ぶと

「すもも、英語のテキスト158ページの6行目から英訳してみて



「？」

「了解しましたです！」

するとすももは英語で、その秀樹のノートに書いてあるのを喋りだすと、拡はそれをよく聞いて

「やっぱりこれ写し間違えてるぞ。」

と拡は秀樹にそう言うと

「そっかーでも、すももって頭良いなー！！！」

「違う違う、すももには英語の対訳ソフトが入れてんだよ。」

「へー！そんな事ができるんだ。」

「どうだ？すもも貸してやろうか？」

拡は秀樹にすももを貸してやろうとしたが

「いいよ別に、オレ自分の力でやりたいから。じゃあバイト行くから。」

そして秀樹はバイトに向かった。でも拡はなんか考え事をした。

バイトが終わり秀樹はオートバジンで、アパートに帰りそして自分の部屋に入る。

「おかえり、秀樹。」

「ちい、ただいま。」

秀樹が疲れた声でちいに言うと、誰かが扉を叩いた。

「ん？誰だ？」



「可愛い……」

そして部屋に戻って買ってきたビールを飲むのだが、ちいは飲み終わって空になった缶ビールを重ねていた。

「そういえば……先生、小学校の先生に憧れだつて……」

秀樹はその事を多香子に聞いてみると

「ダンナにね……小学校の教師になると忙しくて時間がなくなるって。」

「はぁーダンナに……って先生結婚してたんすかーー！？」

突然の真実に驚いてしまふ秀樹だったが

「うん一応、でも……あたしの方が時間があつてもダンナに時間がなくなつちやたから。」

「え？」  
「やっぱりパソコンは可愛い？人間よりパソコンと一緒に居たほうが楽しい？」

そう言う多香子の顔はなんだか寂しそうだった。

その頃、拡は何かを考えながら、サイドバッシャーで走っていると、オープンカーに乗る女性、冴子に気付いてその隣りに止まる。

「なにか？」

冴子は拡に尋ねると

「アンタ……オルフェノクだろ？」

と拡の発言に

「あら？良く分かったわね。」

すると冴子はオープンカーから降りてエビの怪物、ロブスターオルフェノクになる。

「やっぱりそうか！！」

と拡は急いでケースを開けて、カイザドライバーとカイザフォンを出して

『STANDING BY』

「変身！！」

『COMPIETE』

そしてカイザに変身すると、ロブスターはサーベルでカイザを斬りかかろうとしたが、カイザもブレイガンでサーベルを受け止めて、ロブスターに蹴り付けた。

「ふーん、さすが」と戦っただけはあるわね……」

「何っ！じゃあお前！？」

「ええ、私もラッキークローバーよ。」

とロブスターが言った瞬間、カイザをサーベルで突き出して、そのままオープンカーに乗って逃げた。

「あ！しまった。」

カイザは変身を解くのだった。

次の日の朝、秀樹は昨日飲んだために、少しだけ二日酔いになっていた。

「うげー！ー気持ち悪りー！ー」

目覚めが悪くて思うように動けなかったが、布団から人の足が出てくると

「うわあー！！」

と秀樹は驚いてしまい、布団から出てきたのは、下着姿の多香子とちいだった。

「ん……もう朝？」

多香子は秀樹に尋ねると

「あの……その格好は……」

「暑くて脱いだだけよ。あたしも犬井君も。」

「も？え！？」

そう秀樹も下着しか着ていなくて、今気付いた瞬間

「のあああああああ！！」

恥ずかしくて大声で叫ぶと、駐輪場に置いてあるオートバジンは「朝っばらからうるせー！ーなー！ー」

と心の中で呟いた。秀樹は慌てて服に着替えようとしたが

「大丈夫何もしてないから、流し借りるわよ。」

多香子はバックから、歯ブラシを取り出した。

「先生……まさか初めから泊まる気だったんすか？」

「違っわよ。ただ勇気が無くて……」

とまた多香子の顔は寂しそうになり、そして朝食を取ると秀樹と多香子は予備校に、ちいはチロルに向かおうとした。

「犬井さんちいちゃん、おはようございます。」

掃除をしていた千歳は秀樹とちいにあいさつをすると

「そちらの方は？」

と千歳は秀樹に多香子の事を尋ねたが、なんて説明すればいいか分からなかったが

「清水といます。犬井君の予備校の講師です。」

「あらそうでしたか。どうもおはようございます。」

それから秀樹と多香子はオートバジンで予備校に着いて、部屋に入り拡と同じ席に座る。

「よお草加。ん？」

秀樹が見たのは目の下にくまが出来ている、眠たそうな拡のだった。

「お前……スゲーー顔してんな……徹夜か？」

「ま……な……」

「ふーん、まあオレも昨日は清水先生がいきなり来てビックリしたんだよ。」

すると秀樹は昨日の夜の事を拡に教えると

「何!？」

いきなり大声で叫んだので秀樹は驚いてしまう。でも多香子が来たので授業を始めた。

その夜、秀樹はバイトが終わって、アパートに帰ろうとしていたが、雨が降ってきた。

「ああ、早く帰ろう。」

としていた秀樹だったが、何かに気づきオートバジンを降りて、その場所に行こうとすると、そこで見たのは抱き合ってる拡と多香子だった。

「泣くなよ……………」

「泣いてないよ……………」

「じゃあ……………なんで俺の胸が塗れてんだよ？」

「雨のせいに決まってるでしょ？」

2人はなにかの会話をしていた。

「たく……………ほんとに素直じゃねえな、多香子は？」

「素直じゃないよ……………可愛くないもん。」

そう言う多香子は目から涙を出していた。

「可愛いよ。スゲー可愛い。」

と拡は多香子の顔を出すと

「見たな……………お化粧なすり付けたのに……………」

「それでも良いから……………ちょっと黙っててくれないか？」

「なんで？」

泣いている多香子は拡に尋ねる。

「泣いてる女は……………ほんとに可愛いから。」

「女は全部？」

すると拡はまた抱きしめて

「多香子が1番可愛いよ。」

それを見た秀樹はなんだか切なくなりながらも、オートバジンに乗って雨の中アパートに帰るのだった。

今回は少し切ない話にしてみましたがこの続きは、次回まで楽しみに待っていてください。



ある時、秀樹は雨が降る中、濡れながらも切ない顔で立っていた。

「おい。」

すると誰かに呼ばれて後ろを向くと、ファイズが立っていた。

「ファイズ……」

「見るよアレ。」

とファイズの指を差した方に秀樹が顔を向けると、そこに居たのは  
拡と多香子が抱き合っていた。

「あれが人間の本当の愛し方だ。お前が愛するちいは、たしかに可  
愛いがしょせんは機械、偽りな存在だ。」

ファイズのその言葉に、秀樹の心は揺さぶられていると、誰かが秀  
樹のシャツを引っ張るので下を向くと

「アナタはアタシを好き？それとも……」

あの絵本のキャラが居て、その事を秀樹に尋ねたのだった。

「お前は どうする？人と愛するか？それとも機械と愛するか？」

でもまたファイズが聞いてきたので、秀樹はますます戸惑ってしま  
った。

天気の良い朝、秀樹はそんな夢を見たため、眠った気になれなくて、少し眠そうな顔で歯を磨いていた。

「あんな夢で寝た気がしね．．．でもまさか草加と清水先生が、ああゆう関係とは．．．．．」

と秀樹は考えてしまうのだった。

「でも清水先生には結婚してるから．．．．．と言う事は人妻と！！」

シヨックをしてしまう秀樹だったが

「人妻つて？」

ちいが聞いてきた。

「人妻つてというのは、結婚している女の人つて事だよ。」

「結婚？」

「え？いや．．．．．その．．．．．」

違う事を聞いてきたので、なんて答えれば良いか分からなくなっていたその時

「朝でーーーーーす！！お目覚体操の時間でーーーーーす！！いきなりリュックから、すももが出てきたので秀樹は驚いてしまう。

「まずは腕の運動です！ピッ、ピッ、ピッ！」

すももはそのまま体操をするが

「何だこりゃーーーーー！！！！？」

秀樹に大声でツッコまれてしまい

「ひゃーーーーー！怖いです！」

ちいに抱きついてしまう。

「つーーーーか．．．．．なんですももが？」

秀樹はすももが自分の部屋に、なぜ居るのかを聞いてみると

「あい。」

すももはなにか紙を渡すと、秀樹はそれを開いてみると（預かってくれ、頼む）と理由が書いていない、とつても簡単な手紙に

「てっ、何だー！ー！ー！ー！ー！」

また大声を出してしまうのだった。

「お出かけ5分前でー！ー！す。」

すももがそう言うので、急いで予備校に行こうとしたが、とりあえず拡の部屋の扉を叩いたが何も返事は無かった。それから急いで予備校について教室に入ると、なぜか多香子の姿は居なかった。

「あれ？清水先生は？」

「いや、まだ来てないけど？」

「早く来るのに、珍しいよね。」

どうやら他の生徒も、知らないみたいだった。

その頃スマートブレイン本社の社長室には、社長とスマートレディと黒い服を着た男女2人組が居た。

「ついに完成したんですね？」

「ああそつだよ。君と同じパソコンだが、まったく新しい最高のな。」

2人が会話していると

「信次社長、俺達はただ見せるために呼ばれたんですか？」

と黒いサングラスをした男性が信次に尋ねる。

「そうでは無いジーマ。じつはお前達に頼みたい事があるんだ。」  
すると信次が取り出したのは、1枚の写真だった。

「森田社長これは!？」

今度は茶髪のショートヘアの、16歳ぐらいの少女が声を出す。

「そうだデイタ、これは我らが探しているベルトと、同じぐらいの価値があるものだ。おいスマート、彼らに關係するデータを出来るだけ入れろ。」

「はい社長。」

スマートレディは信次の指示に従って、耳からコードを出してデイタとジーマに繋いで、ダウンロードを開始した。そしてダウンロードが終わると

「それじゃあ行くか、デイタ。」

「分かったよジーマ。」

そのまま2人は、窓から出るのだった。

それから秀樹は普通に授業を受けたが、それでも多香子は来なかった。少し心配になりながらも、オートバジンで帰ろうとした時

「電話でーーーーーす!」

とすももは電話がかかってきたと伝える。

「ん………繋いでくれ。」

「あい！分かりましたです！」

するとすももの口から出たのは

『もしもし？』

拡の声だった。

「草加！？」

当然秀樹は大声を上げる。

「お前今どこに！！？」

秀樹が怒鳴るみたいに拡に聞いてみると

『先生と駆け落ち。』

それを聞くとオートバジンをもうスピードで走らせて、急いでアパートに帰って自分の部屋に着くと、すももからコードを出してテレビに繋げると、拡の映像が出たのだった

「よっ、犬井。」

「草加！！お前なんで清水先生と駆け落ちを！っーか、お前らいつからそんな中を！？」

「もう半年近くになるぞ。」

「それオレ達が予備校に来てすぐじゃねー……か！！！」

秀樹が大声で怒鳴った瞬間、突然映像が途切れた。

「あっ！おい！良いところで！！！」

驚いた秀樹がテレビを叩いたが、まったく反応はしなかった。

「仕方ね………稔くんの所に行くしかないな。」

と秀樹はすももを連れて、稔の家に行こうとしたが

「秀樹、駆け落ちって何？」

ちいは秀樹に駆け落ちの事を聞いてきたのだった。

「良い事？悪い事？」

「あ………ゴメンちい、どう答えれば良いか、オレにも分から無いんだ。」

秀樹が悲しい声でちいにそう言うと、外に出てオートバジンで稔の

家に行くのだった。それから秀樹は稔の家に着くと、稔にすももを回線を繋いでくれて頼む。

「はい、これで良いよ。」

と稔が回線を繋いだと、秀樹に伝えると画面から拡が出た。

「大丈夫だったか？犬井？おつ、国分寺家か？」

「そんな事より！なんでオレに黙って!？」

「俺は言っても良かったけどな。でもな……多香子が言わなくても良いって言うんだ。」

「え？」

すると拡は真剣な顔になって話し始めた。

「多香子が結婚してるの知ってるか？」

「先生に聞いたよ。」

「ダンナがな、結婚してすぐにパソコンにハマってさ、最初は多香子もパソコン買ったのが嬉しいからだと思っただよ。」

「はあ……」

「しばらくしたらダンナはパソコンとしか話さなくなって、多香子が帰って来ようが来まいが、全然関係無いんだとよ。」

「そんな事が!？」

秀樹が驚いてしまうが

「お前はピンとこないだろうけど、増えて来てるんだよ。」

その時秀樹は多香子の言った言葉を、思い出したのだ。

「やっぱりパソコンは可愛い？人間よりパソコンと一緒にの方が楽しい？」

あれはこの事だったのだ。

「それで俺の実家の近くに、公園があるんだよ。俺が公園を通って帰ろうとした時、多香子が悲しい顔でブランコに乗ってたんだよ。」

半年前、拡は公園で悲しい顔をした、多香子に尋ねようとした。

「あの……先生？どうしたんですか？鍵を落としたのですか？」

「鍵はあるけど、チエーンがあつて入れないの。」

「もしかして、誰か居るんですか？」

拡は心配そうに多香子に聞いてみた。

「アタシのダンナ。」

「え？結婚してたんですか？という事は喧嘩を？」

「ダンナと喧嘩なんか、というより口も聞いてないから、でもチエーンをかけたって事は、ダンナは自分が帰って来る事もう忘れたのかもしれないから。」

そう言う多香子の目からは、涙が出ていた。

「それで、ここ温泉地に駆け落ちをして来たんだ。」

「そりゃ温泉旅行だろー！ー！ー！ー！？」

笑いながら言う拓に、秀樹が大声で怒鳴る。

「でも俺にとつては駆け落ちだよ。それに多香子が「うん」て言うまで帰れねえし。」

「「うん」って何を？」

「先生と再婚。」

と拓がさわやかな顔でキツパリと言うが

「再婚！ー！ー！ー！ー！？」

秀樹が大声で驚いてしまふのだった。

「というわけで、すももを預かってくれよ。」

「何じゃそりゃー！ー！ー！ー！ー！ー！？」

と2人が会話をしていると

「あら？誰と電話？」

そこに風呂上りの多香子が来た。

「犬井だよ。じゃあな。」

と拓は電話を切ろうとしたら

「ちよつと待て！今度何かあったら絶対言えよ！オレとお前は仮面ライダーで親友だろ？だから絶対に言えよ！！！」

「おう。」

そして電話を切った。

「ほんとに良い子よね。犬井くんって。」

「そうだな……アイツはオルフェノクにも良い奴が居るかもしれないって言うからな~~~~~でもほんとに居たけど。」

少し呆れたみたいに言う拓だった。

「あの晩、犬井くん家に行っでしょ。」

「それで俺は一晩中探しまくって、さらにオルフェノクと戦ったん



だ。  
」  
「ごめんって。あの時は犬井くん眠そうだったんで、意識ない状態だったから言っちゃたの。」

3日前の夜、下着姿の多香子は布団から出て、眠そうになっていた秀樹に尋ねてみた。

「ねえ結婚してる奴が、他の人と結婚するのはだめ？」

少し恥ずかしなりながら言うと、秀樹は微笑みながら

「しょうがないっすよ……好きになっちゃったもんは……  
……けど……そう言うのは結婚してる相手も、好きになった人も辛いから。宙ぶらりじゃ無く、自分が楽なようにするのが良いっすよ。」

喋り終わるとそのまま寝るのだった。

それを聞いた拓は少し驚いた。

「偉そうな事、言いやがって……」

「でも、そのおかげで、自分が楽なようになるうとしたのと拓は多香子に抱きついて

「で、もっと楽になるために俺んどこに来ると?」

「まだそこまでは……でもほんとに楽になるかもしれないから草加くんと一緒なら。」

すると拓と多香子は横になると

「さて問題です。これからは俺をなんと呼べば良いでしょう?」

その時、多香子の顔は赤くなって

「拓……」

「正解。」

一方、稔はそんな秀樹を見て

「やっぱり良い奴だね……犬井さんは。」

「んなんじゃあ……ね……よ。」

少し恥ずかしがる秀樹だったがすももを見て

「パソコンに夢中になったダンナか……本当の女の子を

泣かせて、それでもパソコンが良いのか？」  
秀樹は少しパソコンに疑問を持った。

今回は駆け落ちの話でしたが、それによってパソコンの疑問が増えました。それでは次回もお楽しみにしてください。

夏が少し終わって、少し秋のおいがする天気の良い日、今日は予備校もバイトも休みなので、秀樹は河原でアイスを食べながら昼寝をしていた。

「あ~~~~ほんとに良い天気だ~~~~。拡と清水先生は仲良く温泉に入っているだろうな~~~~。」

秀樹が拡と多香子の事を考えながら、立ち上がり背伸びをすると

「ちゃんと土産を買ってくるかな？まあとりあえず帰る~~~~っ」と。

と秀樹がオートバジンに乗って、アパートに帰る事にした。アパートに着いた秀樹は自分の部屋に入った瞬間、ちいがファイズドライバーを腰に着けて、ファイズフォンに変身コードを入力していた。

「ちい？な~~~~。何して？」

秀樹が少し嫌な予感しながらちいに尋ねた瞬間

「変身！」

ちいはファイズフォンを、ファイズドライバーに差し込んで

『COMPLETE』

いきなりちいはファイズに変身して

「ヤッター~~~~!! 大成功です!!」

すももがボンボンを振って、大声でファイズに変身したちいを褒めるが

「ちい！何やってんだ~~~~!!」

と秀樹が勝手にファイズギアを使ったちいを叱る。

「ごめんなさい。ちい秀樹のマネしてみたくて~~~~。」

ファイズは悲しい声を出して秀樹に謝ると

「あ~~~~！ちいさんを泣かしたです!?! いじめたです!?!」

すももが悲しむファイズを見て大声で叫ぶ。

「え!?! いや!?! ちょっと待て!?!」

秀樹が戸惑いながらも、慌ててすももを止めると

「あのな……ちい……これは戦うための物だから……そういう関係ない事に使うのは、だめなんだよ。」

と秀樹がファイズに説明して

「じゃあ……ちいの事、許してくれる？」

ファイズは悲しそうに秀樹に尋ねると

「ああ、もうこんな事に使わなければな。」

「うん！分かった！！」

とファイズは喜んで秀樹に抱きついたが、いくらちいが変身しているとはいえ、姿がファイズなのでなんか複雑な感じをしてしまう秀樹であった。

「ち……ちい、その……できればスーツを脱いでから抱きついてくれよ……」

「あつ！そうだったね。」

秀樹の言葉に気付いたファイズは、ファイズギアを外してちいの姿に戻ると

「ピーー！！もうすぐちいさんのお出かけの時間でーす。とすももが笛を吹いて叫だ。ちい今日少し遅い時間に仕事する日なので

「じゃあ、行つてきます。」

元気良く秀樹に言うと、そのままちいはチロルに向かうと

「そうだ！新しいマスターとして、すももに新しいパスワードをください！」

「え？新しいマスターって……あつ！」

そう前のすももの持ち主である拓は、多香子と駆け落ちをしていて秀樹にすももを預かっているから、今のすももの持ち主は秀樹であった。

「それじゃあ……『いぬい』で。」

「ブーー！そのパスワードは受け付られません。」

「え？何で!?!?」

新しいパスワードを言うが、なぜか失敗してしまったので尋ねてみると

「お名前や電話番号や誕生日などは、他人に分かりやすいので、パスワードにする事はおすすめ出来ませんです。」

「そ．．．．．そうなんだ。でもな．．．．．」

と秀樹はどういうパスワードにするか、悩むがあの本を見つめて

「．．．．．『ちよびつつ』」

秀樹は思わずパスワードを、ちよびつつに決めてすももに言う。

「音声確認、音声確認、ひらがなですか？カタカナですか？」

「え？」

「全て同じ文字にするのもおすすめ出来ません。ひらがなカタカナ英数字などを交せて、使用する事をおすすめしますです。」

「じゃあ、最初の『チ』最初のカタカナで。」

「パスワード入力完了しました！！」

こうして秀樹はすももに新しいパスワードを入力したが、絵本を読んでいくとまたパソコンに対して考えてしまうのだった。その頃、千歳の部屋で一枚の畳が開かれていて、その地下には沢山のモニターや装置といった設備があつて、千歳はヘルメットを被って中央にある椅子に座っていた。

「．．．．．ついに彼らも、本気になって来たわね。」

モニターを見た千歳は、心配そうに呟くのだった。

その頃チロルでは、休憩時間にちいが絵本を読んでいると、誰かに呼ばれている事に気付いて、目を閉じて耳を澄ました。すると目の前には以前出会った、あの黒い服のちいが立っていた。

「久しぶりね、アナタ。」

「アナタは前、ちいと出会った。」

黒いちいはちいに近づくと

「どう？何か思い出した？」

「ちい……まだ分からない？」

「そう、でもアナタの心は今、ファイズをシンクロしてるのよ。」

「え？」

黒いちいのその言葉に、ちいは驚くように声を出す。

「つまりアナタの心が開く時、秀樹は……ファイズは強くなるのよ。」



「どついう意味？」

「それは……あなたにとって秀樹が『アタシだけのヒト』  
だと思っわ。」

「秀樹が……ちいにとつての？」

「でも秀樹は困るかもしれない。あなたがデキル事とデキナイ事が、  
秀樹を困らすかもしれない。」

「ちい、秀樹を困らせたくない。ちい……いけない子  
になりたくない。」

とちいは悲しそうに、黒いちいに言つと

「心配しないで、あなたは……今のあなたは前のあなたよ  
りシアワセそうだから。」

「しあわせは良い事だつて教えてくれた。秀樹と居るの、良い事？」

「……そうだと良いわね。『ヤツラ』が来る前に、本  
当に秀樹が『アタシだけのヒト』だと良いわね……」

そう告げると黒いちいは、消えてしまう。そしてちいも目を覚ますと  
「ちいちゃん。どうしたの？」

弘康が心配そうにちいに尋ねた。

「大丈夫、なんでもないよ。」

「そう、でも無理しないでね。」

「うん！分かつた！」

とちいは笑顔で返事して仕事をするのだった。

その夜、勇治が公園のベンチに座って考え事をしていた。これから自分は人間として生きていこうか、オルフェノクとして生きていこうか考えていた。でもそんな悩んでる時、誰かが公園に走ってやって来た。それはヘビの怪物、スネークオルフェノクだった。

「俺と同じオルフェノク？でも何か違う？」

勇治はそう思うとスネークオルフェノクは林に隠れると、公園に怪しい2人組みの男が来たので、勇治もとりあえず隠れた。そしてその男達がどこかに行くと、勇治とスネークは林から出て

「ふ~~~~危なかつたぜ。」

スネークは息を吐くと人間の姿に戻った。

「……………お前、名前は？」

「俺？俺は海藤直登だ。お前もオルフェノクだな？」

「ああ……………木場勇治だ。」

「木場か……………覚えとくよ。じゃあな！」

と直登はそのまま公園を出て、どこかに行くのだった。そして勇治も公園を出るのだった。

次の日、秀樹はテレビを見ながら朝食を取っていた。

「最近………勇治に会ってないな………」

秀樹がそう呟きながら朝食を食べ終わると、予備校に行こうと部屋を出てアパートを出ると千歳に出会い

「犬井さん、おはよう。」

「あっ！おはようございます日比谷さん。」

秀樹が千歳に朝のあいさつをすると

「それで、お洋服はもう足りてる？」

「え？いや、全然。」

千歳の質問になんとなく答えると

「良かったらちいちゃんにまた、別のお洋服をあげても良いかしら？」

「ほんとですか！それはありがたいです！」

と秀樹が喜ぶとオートバジンに乗って

「それでは、後でちいちゃんを私の部屋にお呼びしますので。」

「ありがとうございます！それでは行って来ます。」  
そのまま秀樹は予備校に行くのだった。走っていくうちに町に歩いているのは、人がパソコンを連れている姿が沢山居た。  
「なんで………パソコンは人型なんだろう………」  
とオートバジンを走らせながら秀樹が呟くのだった。

その頃、ちいは千歳に呼ばれて部屋に入ると、千歳は別の部屋から洋服を持って来て

「それじゃあ着てみてくれる。」

「うん。」

ちいはその服に着替えた。それはまるで妖精のような姿のちいであつた。

「やっぱり似合うわね。あなたの服ですものね。」  
と千歳は微笑むと、ちいを抱いて座る。

「ちいちゃん、犬井くんはアナタにとっては、どう思っているの？」  
「秀樹は色々教えてくれるし、それに仮面ライダーになってちいを  
守ってくれる。」

「そうなの………本当に犬井くんが、ちいちゃんだけを好  
きになってくれる人だと良いわね。」

すると千歳はポケットから、2枚の写真を出した。それは2枚とも  
沢山のコードに繋がれた、ちいの姿をしたパソコンの写真だった。

それから予備校が終わると、今日も居酒屋は休みなので、秀樹はオ  
ートバジンでまっすぐアパートに帰ろうとしたが、秀樹は後ろで追  
うバイクに気付いたので、秀樹は誰もいない地下の駐車場に誘い込  
む。するとバイクに乗っていた男は、バイクから降りてカエルの姿  
の怪物、フロッグオルフェノクになる。

「やっぱり、オルフェノクか。」

と秀樹がフロッグを睨みながら、腰にファイズドライバーを着けて、

ファイズフォンに変身コードを入れると

『STANDING BY』

「変身！」

『COMPLETE』

秀樹はファイズに変身してファイズエッジを持った瞬間、フロツグはウォーターガンでファイズに溶解液を噴射したが、ファイズはつかさず溶解液を避けて斬りかかったが、フロツグはジャンプして避けると逃げ出した。

「あつ！待て！！」

ファイズはフロツグを追いかけて行く。するとフロツグが駐車場の入り口に立っていると、体から赤い火が出て灰となって崩れた。

「えっ！？なんで!?!」

もちろんファイズが驚いたが、目の前にはオレンジの目で額にはの紋様があつて、黒いスーツと黒いアーマーで白いラインで、右手に銃を持った戦士が立っていた。

「まさか……あれがデルタ。」

そうこれが3人目の戦士、仮面ライダーデルタであった。

chapter / 21 増える疑問と謎（後書き）

今回はついに仮面ライダーデルタが登場しました。そしてあの黒いちいが現れて、ちいに何か告げました。それでは次回を楽しみにして待っていてください。

突然ファイズの前に現れた、3人目のライダーデルタの登場に、強い緊迫感が漂っていた。

「……………あれが……………デルタ。」

ファイズは少し汗をかきながらデルタを見つめると、デルタがデルタムーバーを手に持っていて、グリップを口に向けると

「FIRE。」

『BURST MODE』

と音声入力をして、ファイズに向けて撃った。

「うわっ！本気!?!」

ファイズは驚くが、なんとか避けてもまた撃ち続けるので、急いで逃げた。デルタも撃ちながら追いかけると、目の前にファイズがオートバジンに乗って、走って来るとそのままデルタをぶつけると、勢い良くデルタは吹っ飛んだ。

「た~~~~~一体なにが目的で……………」

ファイズは喋りながら降りた瞬間、デルタがまたデルタムーバーで撃ったので、ファイズエッジで防いだりしているがその隙を着かれて、首を掴まれ地面に叩きつけられたが、デルタの腹を蹴ってなんとか抜け出した。するとデルタは走って行くのだった。

「はぁ、はぁ、ほんとなんだ?」

疲れたように息切れをしながら、独り言を言ながらベルトを取って、変身を解いた秀樹はオートバジンに乗って帰った。



秀樹がアパートに帰って部屋に入ると、千歳に貰った服を着たちい  
を見ると

「ただいま〜くん？ちいその服はもしかして？」

「うん、管理人さんから貰った。ダメなの？」

「あつ！？いや別に……」

少し恥ずかしそうに笑いながら言う、秀樹だったその時

「メールで……す！国分寺様からメールで……す  
！！」

「え？稔くんから？」

といきなりすももが踊りながらメールが来たと伝えると、今度はフ  
アイズフォンから電話が鳴ってきたので出てみた。

「はい！犬井ですけど！！」

「あつ！犬井さん。」

電話をかけたのは稔だった。

「稔くん！さつき君から、メールが届いたけど？」

「それなんだけど、家に気になる画像が、メールと一緒に送られた  
んだ。」

「きつ、気になる画像！？」

「だからすももちゃんに、その画像を転送したんだ。テレビに繋げ

てみたら？」

「あつ、あああ、じゃあ後で連絡するよ。」

電話を切つてさっそく秀樹はすももをテレビに接続すると、画面から画像が表示されて秀樹が目にしたのは、無数のコードがまるで翼のように接続されたちいと、隣りにフェイスギアを持っている研究員の格好をした千歳が居る画像だった。

「ひ……日比谷さん……」

かなり驚いたらしく、秀樹は思わずそう呟いてしまい

「で……でもなんで！？これ、前のメールでも来た、ちいみ  
たいなのだよな？なんで日比谷さんが居るんだよ！？それにこの研  
究者の服を着てるんだ？しかもなんでフェイスギアを……」

と秀樹が汗をかきながら、ちいを見つめる。

「なに？」

「これ……ちいじゃないよな？」

秀樹が指を差してちに画像を見せて聞いてみると、ちいはなんだか悲しい顔をしてしまう。

その頃、デルタはあるガレージに入った。そこにあるのは大型の超高性能バイク、ジェットスライザーだった。デルタはジェットスライザーに乗り込むと、操縦席にあるタッチパネルで、色々と設定をして終わるとそのまま降りて、ガレージから出て行った。

一方ビルの屋上では、ディタとジーマが立って居た。

「どうしたの？ジーマ。」

「例のお嬢さんの反応だ。結構強くなってるな。」

「場所は？」

「まだ無理だな。」

「しかし……なぜあの人は、あんな危険な機能をあの子に入れたんだ？」

「デイタが考えているとジーマが笑いながら」

「俺は、分かるかもしれないな。」

「え？どういう事？」

「まあ~~~~~とりあえず休もうぜ。」

とジーマはデイタの腕を引っ張ると、そのまま抱きついて横になる。

「まったくお前は。」

「良いじゃんかよ。」

のん気に言うジーマだが、真剣な目で空を見つめていた。

その頃、秀樹は稔に連絡をすると、秀樹がオートバジンに乗って、ハンバーガーショップに着いて、しばらく待っていると稔が来てくれた。

「ごめん。待たせちゃったかな？」

「いや、ちよつとだけだよ。」

稔は謝りながら座ると、懐からさっきの画像のプリントを取り出した。

「で……この画像に一緒に写ってる人って。」

「ああ、日比谷さんだ。海水浴の時、君と始めて会った。」

「うん、そうだね……」

と秀樹と稔は、プリントを真剣に見つめる。

「これっていたずらか？」

「いや……これが合成かどうかははっきり言って難しいんだよ。でも……」

「でも？」

「これは本物だろうが偽物だろうが、これを送った相手は、犬井さんによろがあるって事だよな。」

「な……なんで!？」

稔の発言に、秀樹は思わず驚く。

「ぼくは日比谷さんに会っているけど、ちいさんと一緒に写っているピント来なかった。でも、犬井さんは驚いただろ？」

「う……うん。」

「………って事は相手は、ぼくがこの画像を犬井さんに見せるって分かっているんだよ。」

「オ………オレに!?!」

いきなりそんな事を言われたため、つい戸惑ってしまふ秀樹だったが、ある事を考えてしまふ。

「ん?どうしたの?」

「いや………あのさ、パソコンって………なんで人型してるんだと思う?」

すると秀樹が前から思っていた事を、稔に話すと少し驚いた顔になる。

「オツ!オレ、なんか変な事を言ったか?」

「変じゃないけど、全然考えた事なくて、何かあったの?」

「いや………パソコンは人間と見た目は変わらないし、色々出来て便利だけど、でもやっぱりあれは機械、ロボットなんだよね。」

「………そう………だね。」

と外でパソコンを連れてる人を見ながら話すのだった。

「バジンはバイクに変形できるロボットだけど、なんでパソコンはロボットか、アンドロイドとは呼ばないでパソコンで呼んで人型なんだよ。あっ!やつば変な事言ってるか?」

秀樹はつい夢中で話し続けたので、少し恥ずかしそうに稔に尋ねる。「ううん、言われてみればそうだなっと思っただけ、ぼくが生まれた時から、人型パソコンが普及してたから気にならなかったけど、確かにパソコンはロボットだよね。」

今度は稔が考え始めた。

「ぼくには分からないけど、パソコンシステムを最初に作り出した人なら、答えられるかもね。もう亡くなってるけど。」

「………亡くなってるのか………」

「そうらしいよ。それに亡くなってなくても、世紀の大発明をした人だから、一般じゃあ会えないけどね。」

すると稔は真剣な顔になって、秀樹にこう言った。

「でもこれでベルトとchobitsは、なにか関係している事が分かった。そして今までの画像を送った相手は、犬井さんとちいさんを知ってて、今でも見張ってるかもしれないから。」

「う．．．．．うん．．．．．それで．．．．．オレ、デルタに会ったんだ。」

「デルタって、仮面ライダーデルタに！」

「うん、それでいきなり襲われたんだけど、そのままどこかに。」

「そっか．．．．．」

とそのまま2人は、帰るのだった。

その頃、スマートブレイン本社の社長室では、椅子に座る社長の信次がなにか待っている、スマートレディが2つのケースを持って、社長室に入って来て机の上にケースを置いた。

「完成したのか。」

「はい！ついに完成しました。」

するとスマートレディが2つのケースを開けると、そこにはそれぞれ白と黒のベルトが入っていた。

「あははははははは、ついに帝王のベルトが完成したか！！」

信次は体から青黒いオーラを出しながら笑い出すのだった。



chapter / 22 新たな画像（後書き）

今回は秀樹が思っていた事と、考えていた事を稔に打ち明けました。そしてスマートブレインでは、ついに帝王のベルトが登場しました。次回を楽しみにして待っていてください。

ある日の深夜の事、勇治はレンタルビデオ屋に来ていた。

「すみません。DVDを借りたいのですけど。」

「良いですけど、会員証はありますか？」

「あっ………持ってません。」

と勇治は戸惑いながら店員に答えると

「それではお作りしますが、学生証か運転免許証はありますか？」

「運転免許？」

すると勇治はなにかを考え始めた。

その次の日になぜか秀樹が、自動車学校に居た。

「すみませ〜〜〜ん。今日はお願いしま〜〜〜す。」

「すみませんじゃないですよ！君が何でここに来たか分かってますか？」

「いや〜〜〜人をはねちゃってね〜〜〜免許取り消してみたいな？」

「なんで人をはねておいて、そんな余裕な態度なの！？」

と秀樹のやる気と反省の無い態度と、その発言に教官は怒って怒鳴りつける。ちなみにそのはねた人と言うのは、前戦ったデルタの事です。

「まったくいいですか？たぶん大丈夫だろうの、だろう運転は危険ですので、車が右折するかもしれないの、かもしれない運転の方が少しは安全なのですよ。」  
教官が秀樹を注意しながら、だろ〜運転とかもしれない運転を教える

「ほら助手席に座って、どうやら君に足りないのは注意力みたいだから。今から合同教習をするからよろしくね。」

と教官に言われたまま助手席に座ろうとして、車の扉を開けるが運転席に座っているのは

「あつ！どうも木場勇治でっ！！？」

勇治だったので、秀樹は強く蹴り飛ばす。

「犬井さん、かもしれない運転だよ。もしかしたら合同教習の相手が、関り合いになりたくない人かもしれない。」

「すみません、ビックリしたので。」

「ほら木場さん、周囲確認してから乗ってね。」

「はい、もしかしたら車の下に誰かが？」

「もしかしたら確認中に車が発進するかもしれない。」

と車の下に潜り込んで覗き込む勇治を、秀樹が車を発進させて轢いた。

「もしかしたら………車のトランクに誰かが………」

「もしかしたらいきなり車がバツクするかもしれない。」

今度は車の後ろに来た勇治を、秀樹が車をバツクして激突させた。

「いい加減にしろ！俺は真面目に免許取りに来たんだぞ！！」

「木場さんはね、ビデオ屋の会員になりたくて来たんだよ。」

「オレだって真面目に取り直しに来たんだよ！！」

それでも結局一緒にやる事になった。

「へ〜〜〜〜〜〜〜〜木場さん、良いハンドル捌きだね。でもスピード出しすぎだね！？」

車はかなり速く走っていて、運転する勇治は汗をかいていた。

「お前……ハンドル寄り過ぎだろ？」

「もしかしたら……俺は緊張しているのかもしれない。」

「どんなかもしれない運転だよ！お前完全に緊張し過ぎだろ！？」

猛スピードで走るので急いで秀樹は、助手席のブレーキを踏もうとしたら、なぜか勇治が秀樹の足を掴んで止めた。

「もしかしたら……スピード50キロ以下にする  
と爆発する爆弾が！！」

「どんだけ手の込んだかもしれない運転！？」

そんなんでついに車は暴走して、カーブを一直線に進んで行く

「もっ、もしかしたら……」

ここは夕暮れ時のある屋敷から始まる話で、50代ぐらいの男と30代ぐらいの女性が、静かに食事をしていた。

「すっかり寂しくなりましたね~~~~~」朔美さんの花嫁姿、お母様にも見せたかったわ。」

「ふん、なにが娘だ。大切に育てたのに嫁に行っちゃまって、俺一人でどうすりゃいいんだよ？」

「あら？娘ならいますわよ。」

すると男は悲しそうな顔でコップの酒を飲んだ。

「.....なあ、奈津子さん。アンタ.....いい加減に良い人を探したらどうだい？」

じつは奈津子は男の息子の嫁だが、その息子は死んでしまっていたのだった。

「血の繋がりが無いアンタが、こんな老いぼれをせわする義理は無いだろ？アンタは器量も良いから、幾らでも相手が居ると思つよ。」  
「.....こんなおばさんに、貰い手なんて無いと思いますよ。まあ、いつでもこんな家出て行きますよ。」

しかしそんな言葉遣いをする奈津子だったが、出て行かずに男の世話を焼いていた。でもある夜の日に、男が散歩をしていて、自分の家の塀の横を歩いてたその時

「もういいじゃないか!!」

と家の庭から誰かの声がしたので、板塀の隙間から除いて見ると、家の縁側に奈津子と見知らぬ青年が座っていた。

「いい加減に僕と新しい道を、踏み出して行こうじゃないか!!」  
「..... 私は自分の人生を、進んでいるつもりです。」

「じゃあなぜ!?他に男が!?!」

「私には..... お養父様がいますから。」

それを聞いたお養父様は涙を流すと、なぜか3人はモグナの顔になった。

「とモグラ達が、このカーブの下でやっているかもしれない。」  
「知るかーーーーー！！無駄に長げーーーーーし、ただの  
妄想だろうが！！」

妄想する勇治に秀樹は完全にキレて、急いでブレーキを踏んで車を  
止めると、ちょうど目の前には踏切があった。

「犬井さん……………踏み切り前には一時停止……………  
……………よく止めたね。」

なぜか教官は感動の涙で泣いていた。

「なんで泣いてるの？」  
「はい、これもかもしれない運転だからね。」  
「……………はっ！聞こえる！電車の音が！」  
「聞こえねーーーーよ。」

暴走する勇治に秀樹が冷たい目で言うと

「あっ！お養父様！？」

線路の上にはお養父様が横になっていた。

「俺さえ居なければ……………」



どうやらお養父様は、奈津子の為に自殺しようとしていた。

「今なら、間に合えるかもしれない!!」

車から出た勇治は急いで、お養父様を助けたが三角コーンだった。

「バカヤロー！お前が死んだら、奈津子さんは悲しむだけだぞ!!」

「俺が居ても……奈津子は幸せにはならねえ……」  
・（勇治裏声）

と勇治は裏声でお養父様を演じた。

「俺は居ない方が良いのさ。そうすれば奈津子は自由になれる（勇

治裏声）」  
「それは違うわ！お養父さっ！（勇治裏声B）」

そして秀樹は勇治を轢くと

「犬井さん、かもしれない運転は、ほどほどにした方が良くかもしれない。」

「そうかもしれない。」

そしてその夜、勇治は別のビデオ屋に来た。

「あの………DVDを借りたいのですが。」

「すみませんが会員証は？」

「いえ、ありません。」

「だったら作りますが、身分証明になるものはありますか？」

「じゃあこれで。」

すると勇治は自分の死亡届を取り出した。

chapter / 23 免許を取りに行こう(後書き)

今回は銀魂風の話にしてみました。じつはアニメちよびっツの秀樹の声優は、銀魂の銀時と同じ杉田智和です。  
次回を楽しみにして待っていてください。

chapter / 24 旅をする人達

ある日、秀樹はちいを向かいに行くのだった。チロルの前に着くとオートバジンから降りて

「ちい。」

「秀樹!!」

とチロルに入るとちいが笑顔で抱きついて来た。

「あっ……ちい。ここで抱きつくのは……」  
「ごめん秀樹。」

秀樹は少し照れながら注意すると、ちいは素直に返事して離れた。

「あはははははは、こんにちわ犬井君。」  
「どうも。」  
「それじゃあ、ち衣着替えてくる。」  
「だったら外で待ってるよ。」

と秀樹は外に出たその時チロルと隣の店の、隙間の細道になにか物音が聞こえて

「いたたたたたた。」  
「無事に到着だね。」  
「どこが無事に到着だ!?!こんな狭い細道に!!」  
「でも海の上じゃなくて良かったね!」

と声も聞こえてきたので秀樹は隙間を除いて見るとそこには、マン

トを着た少年と青年と男の3人と、額に水晶のあるうさぎのような生き物で、じつは彼らはサクラの記憶の羽を集めるために旅をした、小狼と黒鋼とファイ・D・フローライトとモコナだった。彼らは全ての決着を着けて後、サクラと別れを告げまた異世界へと旅立ったのだ。

「君・・・・・・・・誰？」

「それはこっちの台詞だ。」

ファイは微笑みながら尋ねると、秀樹はツツコミ風に返事する。

「やったーーーーー!!!人間が居るーーーーー!!!」

モコナが声を上げてはしゃぐが

「おい!ここはお前のような白まんじゅうみてえのが、喋る世界じゃ解んねえだろうが!!!」

黒鋼がモコナの口を塞いで言うと

「いや・・・・・・・・・・それってパソコン？」

と秀樹が不思議そうに尋ねると

「モコナはモコナ!!!」

「だから喋るな!!!」

モコナが元気よく返事すると、また黒鋼が怒鳴って口を塞ぐ。

「秀樹?どうしたの?」

「あつ、ちい。」

するとそこにちいが顔を出すと

「あ!？」

ファイが突然驚いた顔になる。でもしばらくすると微笑んで

「そうか、ちいって言うんだね。」

とちいの頭を撫でながら言う。それからしばらくして公園で小狼達は今、旅をしているのを秀樹とちいに話した。

「小狼達、色んな所に行ってるんだね。」

「ええ。」

ちいは小狼の話を受得して

「つ~~~~~かなんだよ旅って?ニートですかコノヤロー」

と秀樹は鼻をほじながら、バカにするように発言する。

「なんだ?その態度?」

黒鋼は秀樹の態度に怒り出す。

「まあ~~~~まあ~~~~落ち着きなよ黒りん。」

「黒りんって言うな!」

「黒りん!黒りん!」

「うるせ!」

そんなファイとモコナを追い掛け回す黒鋼だった。

「すみませんね。こんな人達で。」

「別に……」

「ねえ、泊まるどころ無いなら、家にきたら？」

ちいは小狼達を招待しようとする。

「なあ、ちい。家は人を泊める余裕は無いよ。」

「でも困ってるよ？」

はじめは断ろうとした秀樹だったが、ちいのうるうる攻撃に負けて、結局泊める事になった。そしてアパートに着くと

「お客さまですー……」

「あっ!？」

「こいつは!？」

すももの登場に小狼と黒鋼は驚いた。なぜなら2人は別の世界ですももと出会っているからだ。それから次の日の朝。

「ハイ集合!」

なぜか不機嫌になった秀樹が

「よく聞け。オレが楽しみに取っておいた、チョコといちご牛乳が消えてしまった。犯人は素直に名乗り上げろ!今なら4分の3殺しで済むから。」

「そうです!素直に白状するです!」

不機嫌な理由はそれだった。

「おい、4分の3って死んでんだろつ。」

「食べ物の恨みは本当に怖いね。」

「でも秀樹さん、少し落ち着いてくださいよ。」

「よーーーーーし。モコナが食べた犯人を見つけてやる!!」

とモコナが口の周りをチョコだらけで、さらに鼻から鼻血を出しながら叫んで

「犯人はオレの目の前に居るぞ。旨かったか？オレのチョコといちご牛乳？」

秀樹はモコナの耳を掴んで自分の顔に近づきながら言う。

「チョコ食べて鼻血なんてベタだよ。」

「とぼけんな!!鼻血から糖分がプンプンプン!!」

「ちがうもん！鼻を深追いしただけだもん。」

「そんな深追いするわけねえだろ！定年間の刑事か！お前は!？」

「たとえば分かんねえよ！てか落ち着け!!」

黒鋼は秀樹を落ち着かせた。

「まったく……オレは行って来るから、ちいもちゃんと行くんだぞ。」

と予備校に向かうとちいも支度した。

「あの……ちいさん。良かったらオレもお手伝いしましょうか？」



「うん、良いよ。」

「軽っ……」

ちいの軽さに黒鯛はシッ「む。

それからしばらくして、ちいと小狼とモコナはチロルに来ると、弘康は少し驚いたけどなんとか理解したみたいなので、ちいと小狼は

クッキーを袋詰めにする作業をして、モコナはぬいぐるみのフリをしていた。

「小狼さん上手。」

「結構こういつの得意ですから。」

と作業しながら少しだけ楽しく会話する。

「ところで、秀樹さんはちいさんの事を、大切にしてるみたいですね。」

「うん。秀樹はいつもちいを守っているの。」

「そうですね。じつはオレも秀樹さんと同じように、守りたい人が居ます。」

「へ〜〜〜〜〜〜その人は今どこに？」

すると小狼は少し黙ると

「今は遠い所に居ますけど、いつか会えると信じています。」

「それじゃあ、その為の旅なの？」

「いえ……………目的地のある旅じゃなくて、旅する為の旅なんだ。」

「そうなの？」

ちいの質問に小狼は首を縦に振る。

「でも……………いつか会いたいから、大切な人に。」

「大切な人……………アタシだけのヒト……………」

小狼の言葉にちいは少しだけ腕が止まったが作業を再開した。

しばらくしてバイトが終わるとファイと黒鋼とモコナが向かいに来てくれた。

「向かいに来たぜ。」

「あれ？秀樹は？」

「どうやら、まだ来ていないみたいだね。」

そして4人と1モコナはそのまま帰るがしばらくすると、帰り道の公園で秀樹が男にからまれてる姿があった。

「あれって、秀樹さん！」

「なんだかやばそうだね。」

「しかし……あの男。なにか変だぞ?」

なぜか思わず隠れてしまうちい達だったが、黒鋼の勘は正しく男はキノコの怪物、トードスツールオルフェノクになった。

「え!? あれは!?!」

「オルフェノクだ!」

「オルフェノク?」

「どうやら、この世界も訳ありだね。」

驚いた小狼達だったが、秀樹はため息を吐いて

「まったく、めんどくさいな。」

と秀樹はめんどくさそうにファイズドライバーを装着して

『STANDING BY』

「変身!」

『COMPLETE』

そのまま秀樹はファイズに変身した。

「仮面ライダーだ!」

モコナは変身したファイズにはしゃいだ。

「ちいさん、あれって!?!」

「うん! 秀樹は仮面ライダーファイズになって守ってくれるの。」

と話してる間もファイズとトードスツールの、激しいバトルは続けられていた。トードスツールは頭の笠から毒胞子を出そうとしたが、すぐにフォンブラスターで撃ってなんとか止めた。しかしトードスツールが今度は棍棒での棒術で反撃したが、ファイズは避けて蹴り付けたりして、いつもどおりファイズポインターをミッションメモリーに差して、足につけてそのままファイズフォンのENTERを押し

『EXCEED CHBGE』

そしていつもどおりの必殺クリムゾンスマッシュを決め込んだ。

「……………おい。なに隠れてんだよ。」

ファイズは既に隠れているのに気付いたらしく、変身を解いて言うと小狼達は出て来た。

「すみません。なんかタイミングが。」

小狼が謝罪をするとモコナの耳にある耳飾の宝石が光った。

「うわぁ……………綺麗……………」

「おい、これって。」

「どうやら次の世界へ、行かなきゃならないんだ。」

そしてモコナは魔法陣を展開した。

「じゃあね。ちいちゃん。」

ファイは微笑みながらちいの頭を優しく撫でた。

「うん！また来てね。」  
「じゃあな。」

秀樹とちいは手を振って、3人はモコナの口の中に吸い込んで、モコナは魔法陣の中に消えた。そして2人は夜空を見ながら帰っていった。

chapter / 24 旅をする人達（後書き）

今回はひさしぶりの投稿で、アニメ「こぼと。」みたいな、小狼達を登場させました。

次回を楽しみにして待っていてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4565i/>

---

アタシだけのヒト～555

2011年11月15日22時00分発行